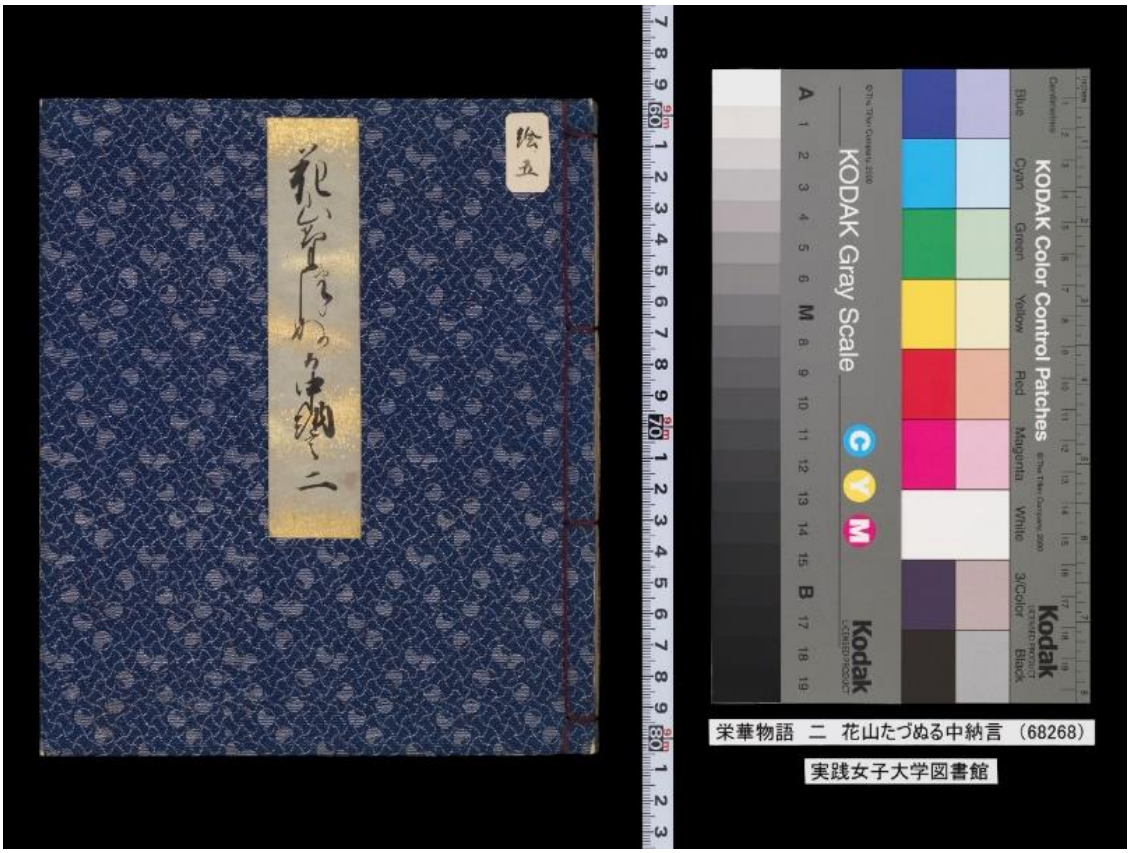
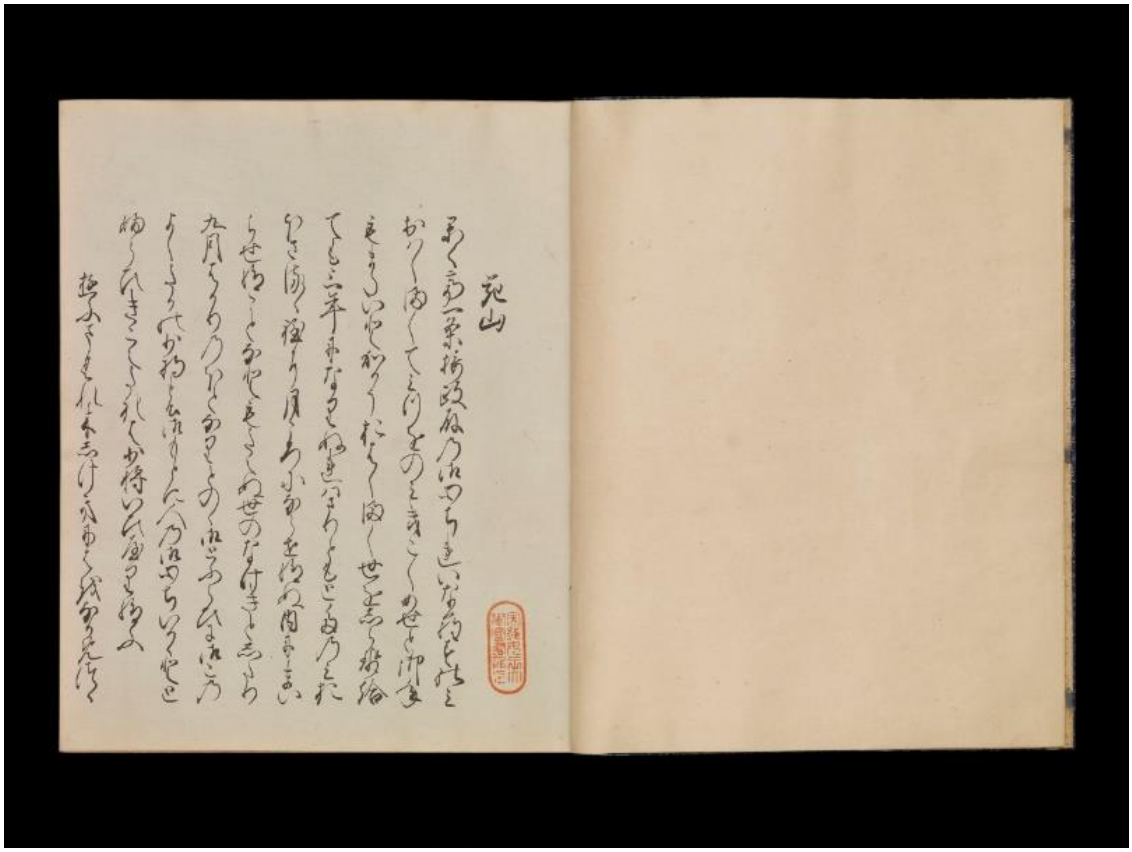


栄華物語　二　花山たづぬる中納言　(68268)

実践女子大学図書館

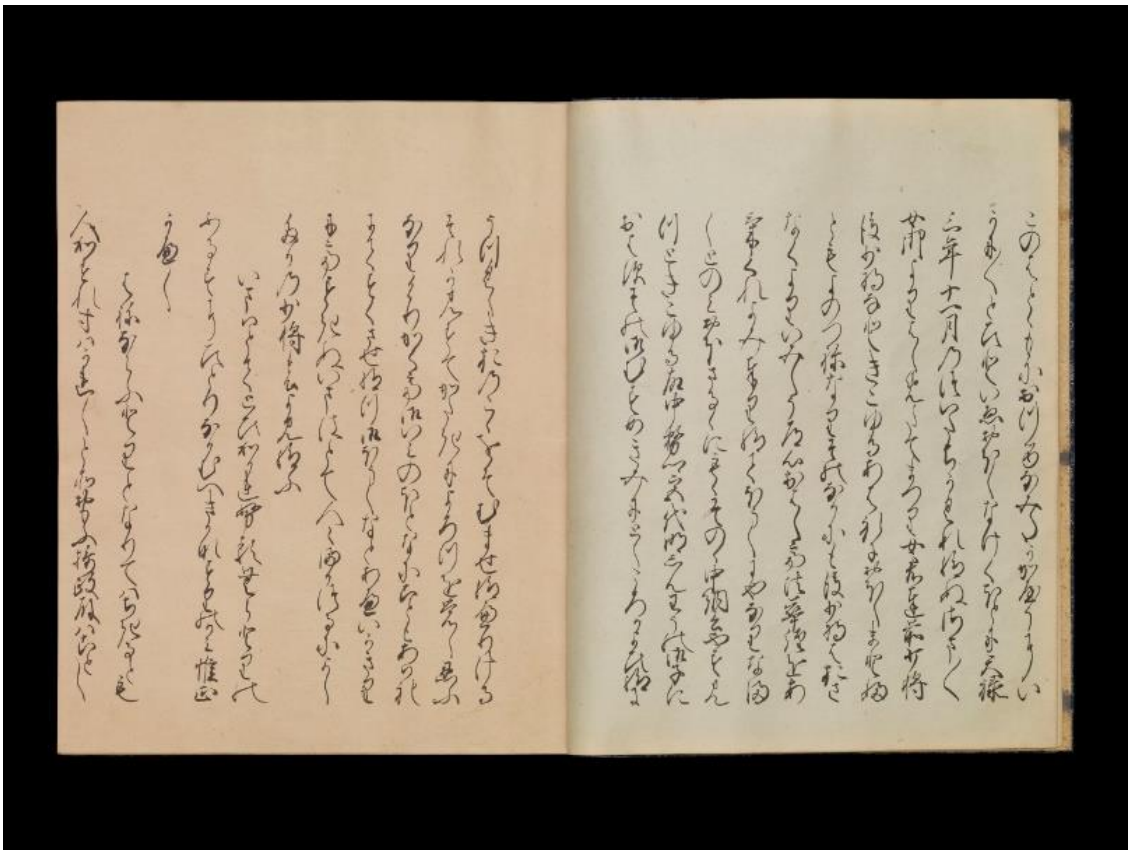
花山たづぬる中納言　二



花山

かくて一条摂政殿の御心ちれいならずのみおはしまして、みづをのみきこしめせど、御年もまだいとわかうおはしまし、世をしらせ給ても三年になりぬれば、さりともたのみおぼさるゝ程に、月ごろにならせ給ぬ。内にまいらせ給ことなどもたえぬ。世のなげきとしたり。九月ばかりのほどなり。とのゝ御とぶらひに、御このよしたかの少将の御もとに、人の御心ちいかゞととぶらひきこえたれば、少将いひやり給ふ、

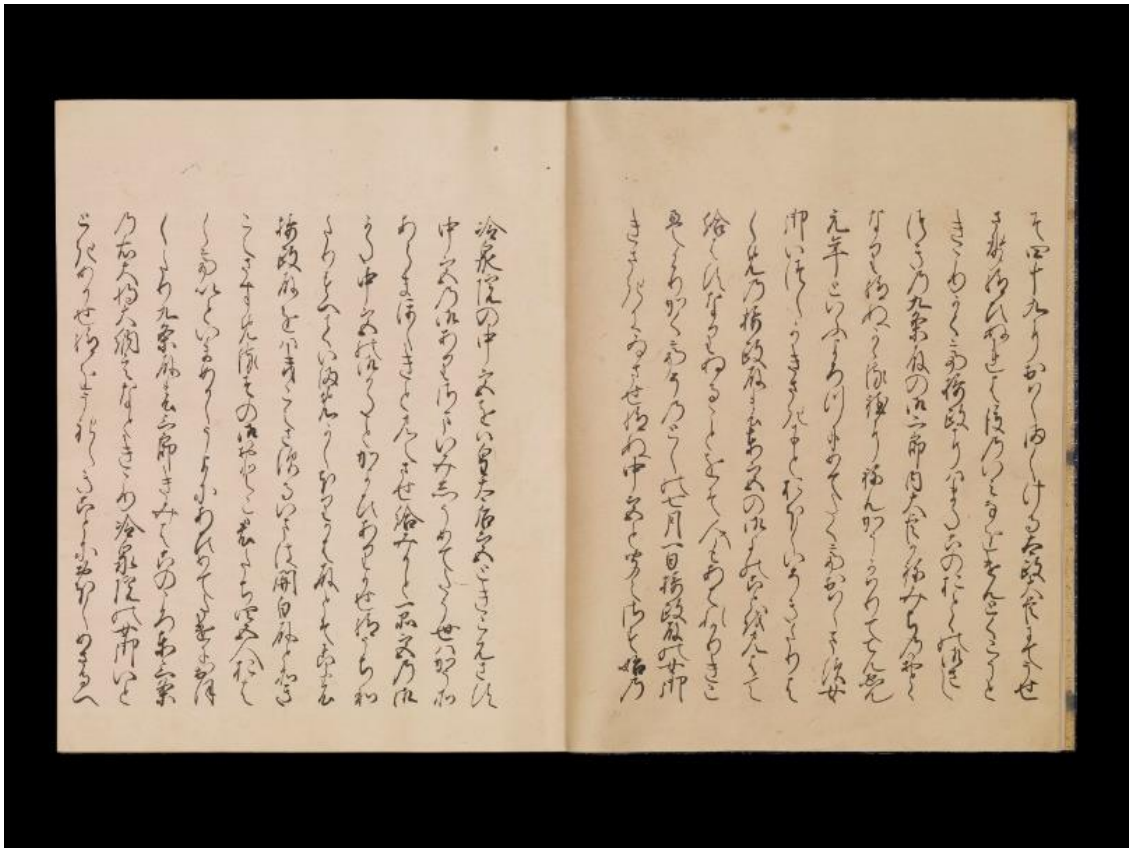
ゆうまぐれ木しげきにはをながめつゝ



このはとゝもにおつるなみだか、かやうに、いかにいかにとひとゝおぼしなげくほどに、天禄三年十一月のついたちかくれ給ぬ。さまざま、女御よりはじめたてまつり、女君達、前少将、後少将などきこゆる、あはれにおぼしまどふともよのつねなり。そのなかにも後少将は、おさなくよりいみじう道心おはして、法華経をあけくれよみ奉り給て、ほうしにやなりなましとのみおぼさるゝに、もゝぞのゝ中納言やすみつときこゆる故中務卿宮代明しんわうの御子におはす、その御むすめぎみにとしごろかよひ給にうつくしきおのこゝをぞむませ給へりける、それが見すてがたきに、よろづを覚し忍ぶなりけり。かくて御いみのほど、なにごともあはれにてすぐさせ給つ。御ほうじなどあべいかぎりにてすぎぬ。いまはとて人々まかづるに、よしたかの少将のよみ給ふ、

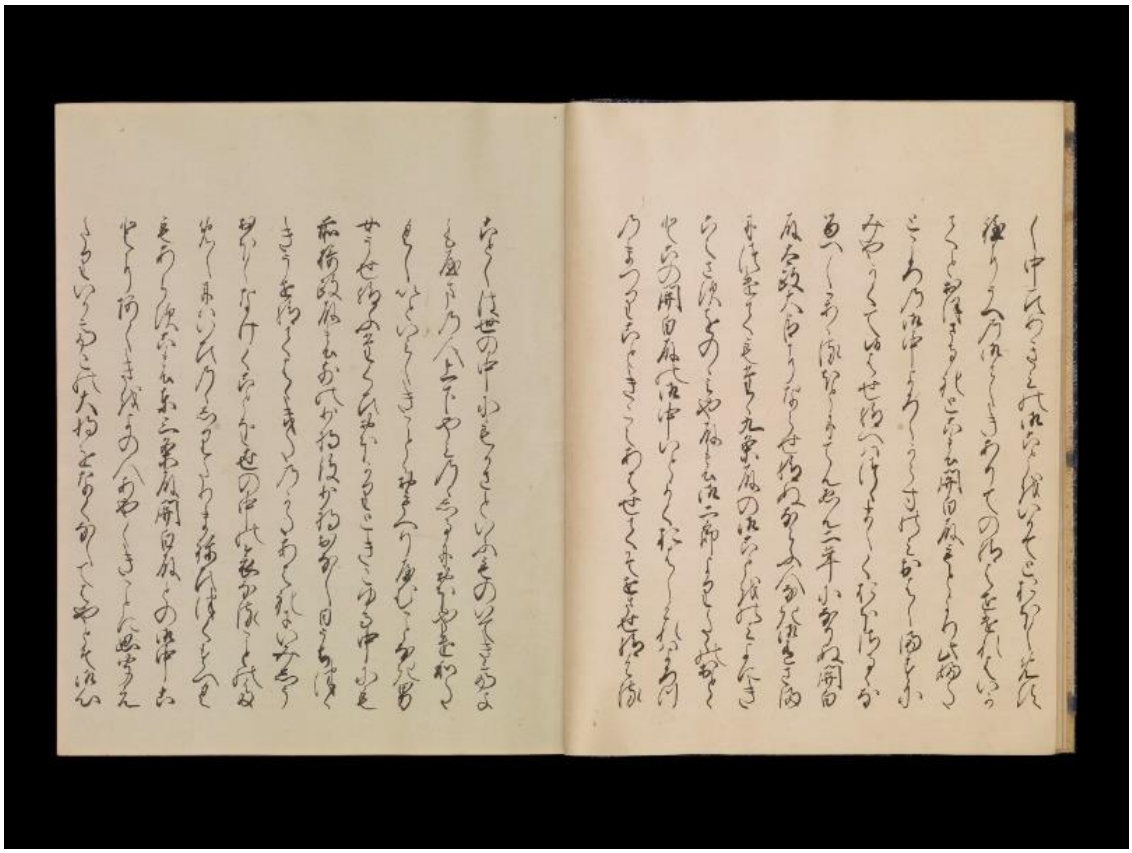
いまはとてとびわかれぬるむらどりのふるすにひとりながむべきかなすりのかみ惟正かへし、

はねならぶとりとなりてはちぎるとも人わすれずはかれじとぞおもふ、摂政殿はことし



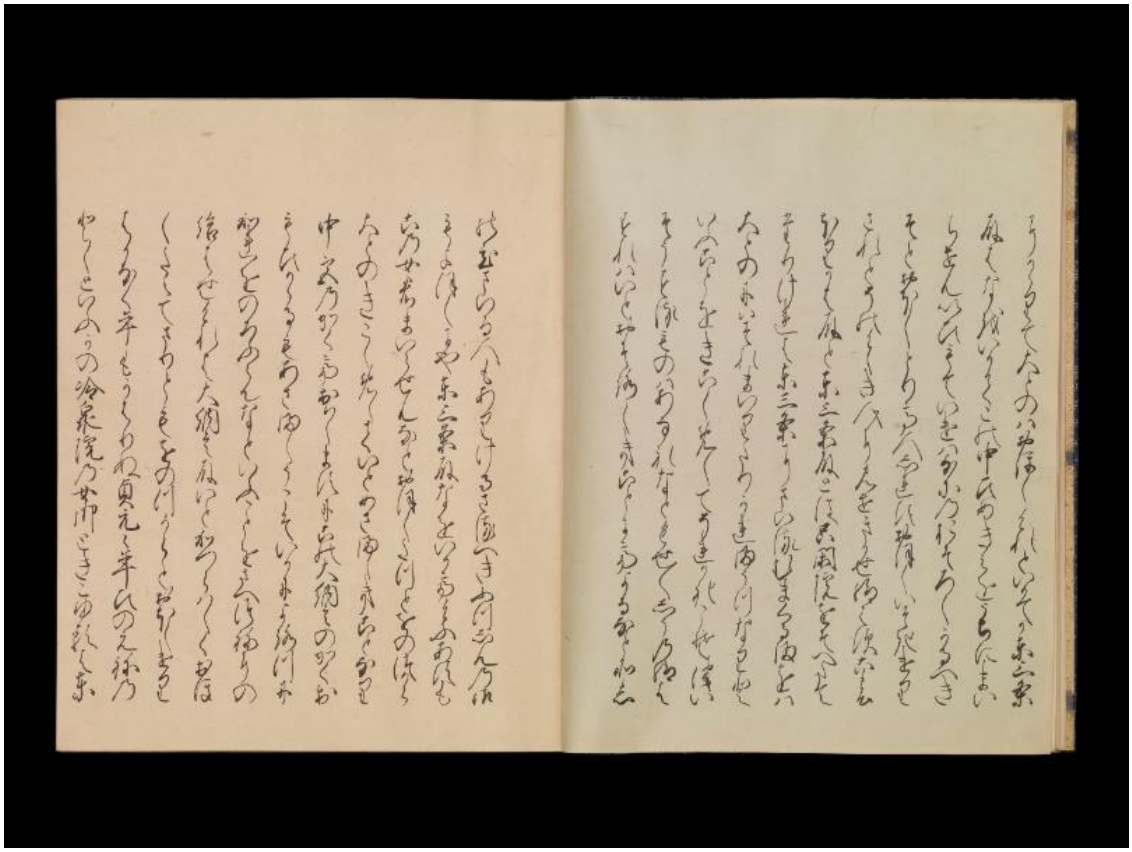
ぞ四十九におはしましける。太政大臣にてうせ
させ給ひぬれば、後のいみなをけんとくこうと
きこゆかくて摂政には、またこのおとゞの御さし
つぎの九条殿の御二郎、内大臣かねみちのおとゞ
なり給ぬ。かゝる程にねんがうかはりてて
元年といふ。よろづにめでたくておはします。女
御いつしかきさきにとおぼしいそぎたり。は
じめの摂政殿の、東宮に御よのことを見はて
給はずなりぬることをぞ、人もあはれがりきこ
えけり。かくてそのとしの七月一日摂政殿の女御、
ききさきにゐさせ給ぬ。中宮と聞えさす。始の

冷泉院の中宮をば皇太后宮ときこえさす。
中宮の御ありさまいみじうめでたう、世はかうぞ
あらまほしきと見えさせ給。みかど、一品宮の御
かた、中宮の御かたとかよひありかせ給。うちわ
たりすべていまめかし。ほりかは殿とぞこの
摂政殿をばきこえさする、いまは関白殿とぞき
こえさすめる。その御おとこ君だち四五人おは
して、いといまめかしう、よにあひめでたげにおぼ
したり。九条殿の三郎ぎみは、このごろ東三条
の右大将大納言などきこゆ。冷泉院の女御いと
ときめかせ給をうれしきことにおぼしめさるべ

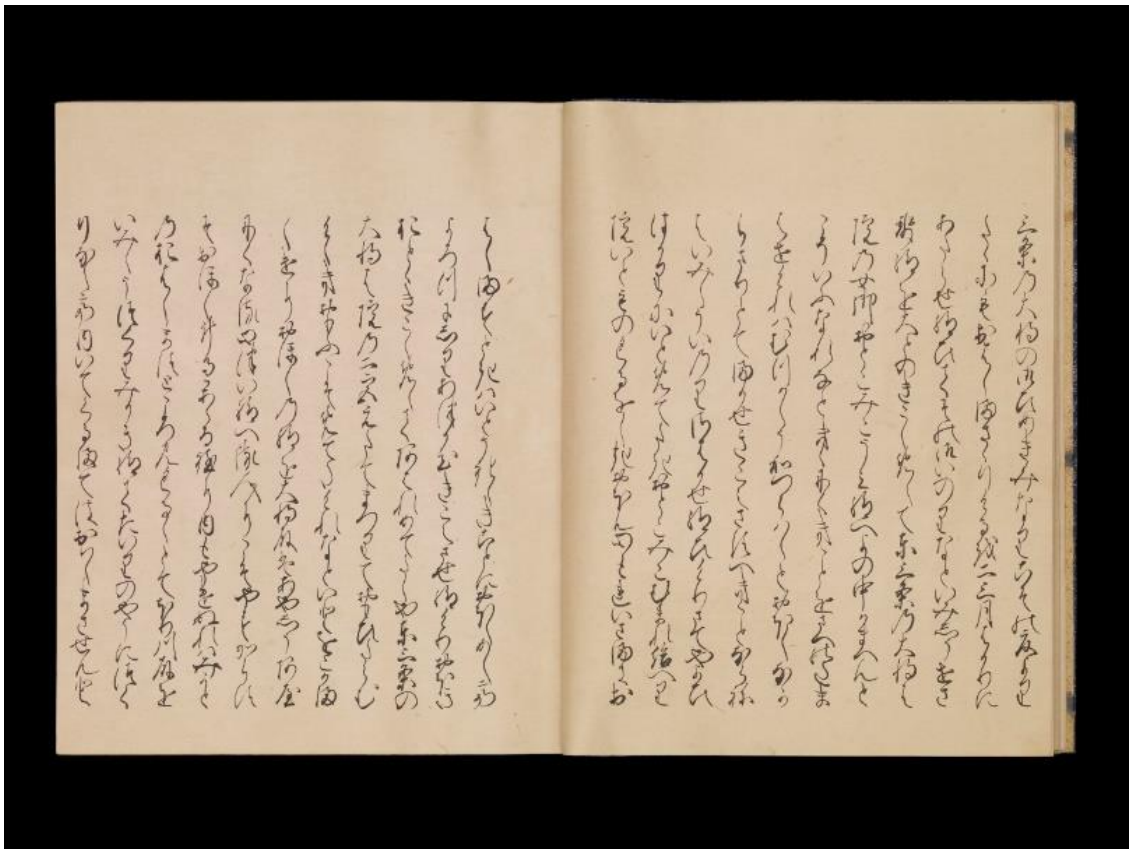


し。中ひめぎみの御ことをいかでとおぼしめす
程に、うへの御けしきありての給はせければ、いか
でとおぼさるれど、この関白殿、もとより此ふた
ところの御中よろしからずのみおはしますに、
みやかくて御はせ給へば、つゝましくおぼさるゝな
るべし。かゝるほどにてんゑん二年になりぬ。関白
殿、太政大臣になれせ給ぬ。ならぶ人なき御有さま
につけても、たゞ九条殿の御ことをのみよにき
こえさす。をのゝみや殿の御二郎よりたゞのおとゞ
と、この関白殿の御中いとよくおはしければ、よろづ
のまつりごときこえあはせてぞせさせ給ける。

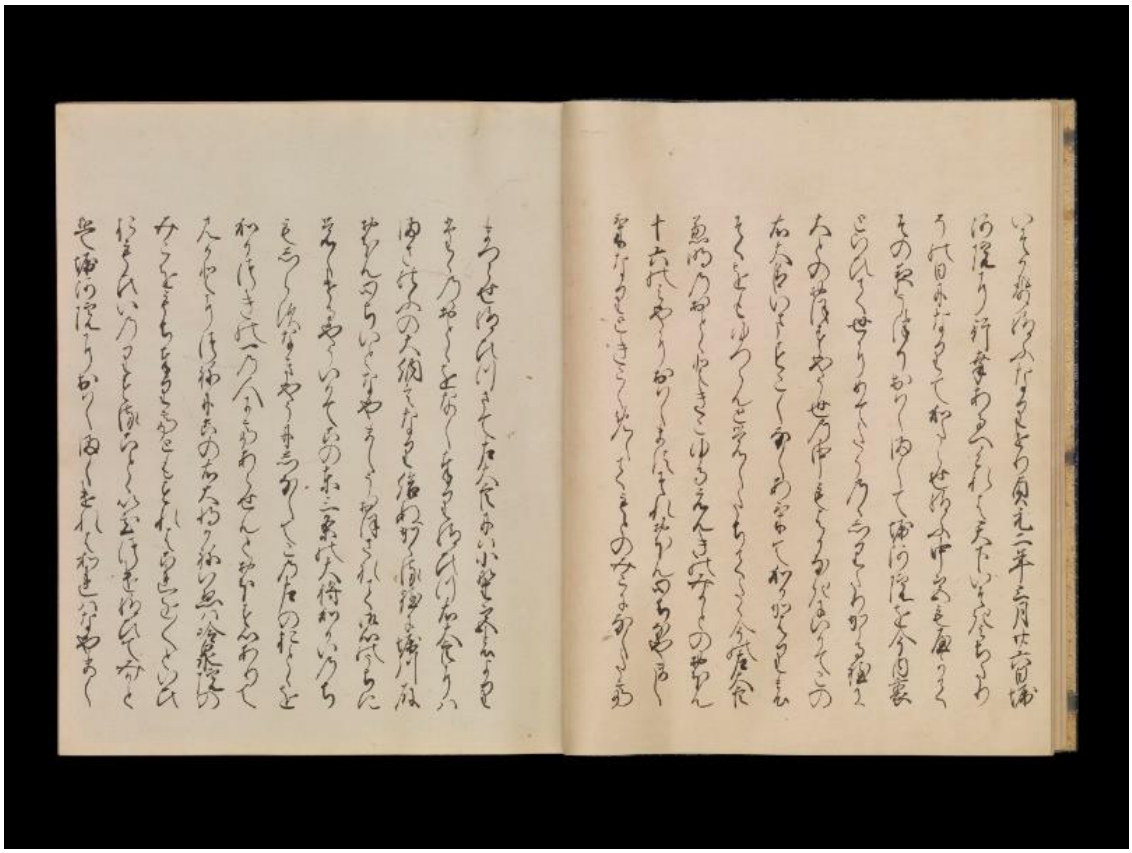
ことしは世の中にもがさといふものいできて、よ
もやまの人、上下やみのゝしるに、おほやけわた
くしいといみじきことゝおもへり。やむごとなき男
女うせ給ふたぐひおほかりときこゆる中にも、
前摂政どのの前の少将、後少将、おなじ日うちつゞ
きうせ給て、はゝきたのかたあはれにいみじう
おぼしなげくことを、世の中の哀なることのた
めしにはいひのゝしりたり。まねびつくすべく
もあらず。この東三条殿、関白殿との御中こ
とにあしきを、よの人あやしきことに思聞え
たり。いかでこの大将をなくなしてばやとぞ、御心



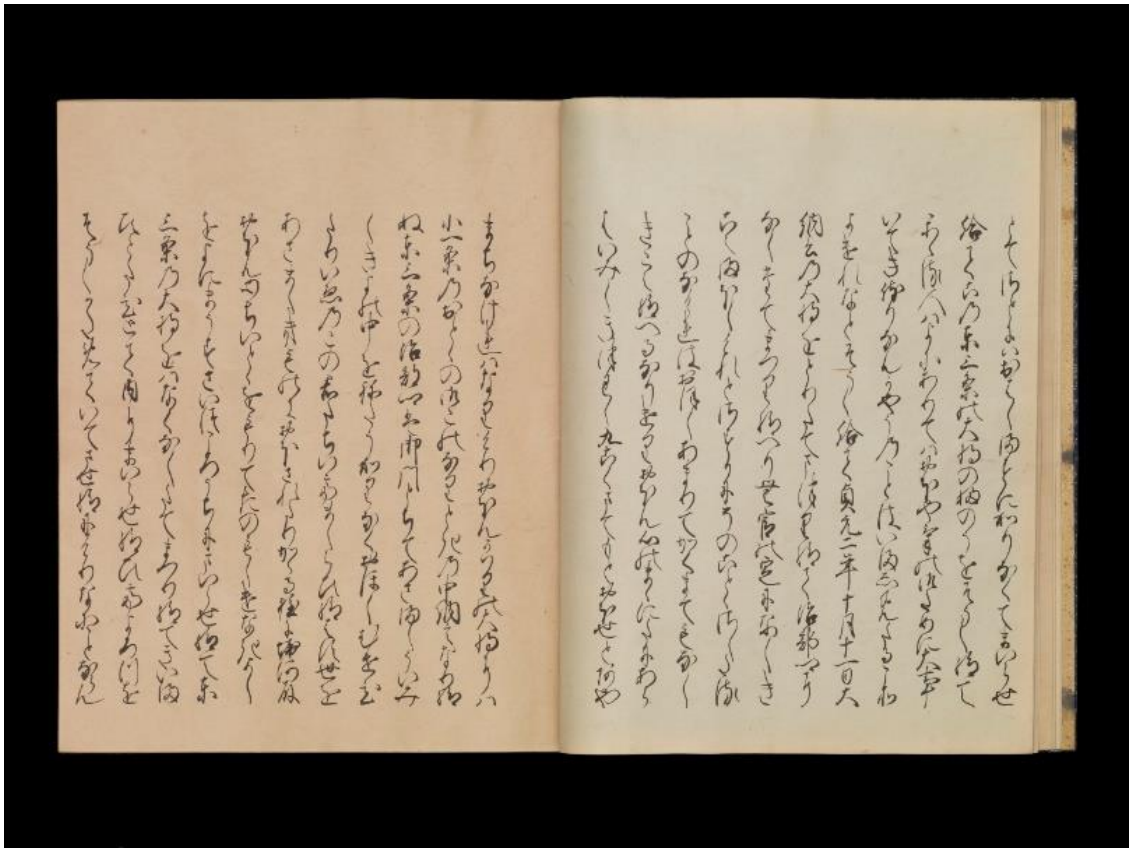
にかゝりて大どのはおぼしけれど、いかでか、東三条殿は、なをいかでこの中ひめぎみをうちにまいらせん、いひもていけばなにのおそろしかるべきぞとおぼしとりて、人しれずおぼしいそぎけり。されどそのけしき、人に見せきかせ給はず。このほりかは殿と東三条殿とは、只閑院をぞへだてたければ、東三条にまいりむまくるまをば、大とのには、「それまいりたり」「かれまうづなり」といふことをきこしめして、「それかれこそついそうするものはあるれ」など、くせぐせしうの給はすれば、いとおそろしきことにて、よるなどぞしのびまいる人もありける。さるべきぶっしんの御もよほしにや、東三条殿、なをいかでけふあすもこの女君まいらせんなどおぼしたつと、をのづから大とのきこしめして、「いとめざましきことなり。中宮のかくておはしますに、この大納言のかくおもひかゝるもあさましうこそ。いかによろづにわれをのろふらん」などいふことをさへ、つねにの給はせければ、大納言殿いとわづらはしくおぼしたえて、さりともをのづからとおぼしけり。はかなく年もかはりぬ。貞元々年ひのえねのとしといふ。かの冷泉院の女御ときこゆるは、東



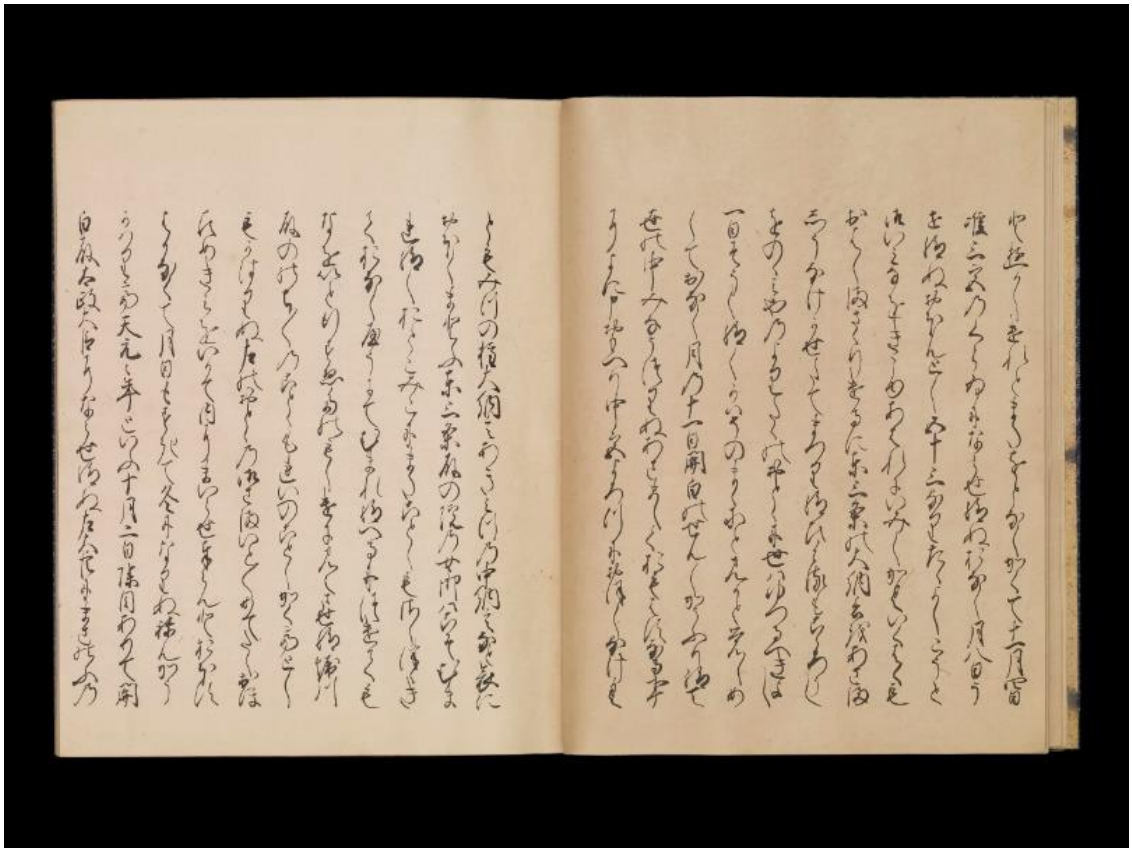
三条の大将の御ひめぎみなり、こぞの夏より
たゞにもおはしまさゞりけるを、二三月ばかりに
あたらせ給ひて、その御いのりなどいみじせさ
せ給を、大とのきこしめして、東三条の大将は、
『院の女御おとこみこうみ給へ。よの中かまへん』と
こそいふなれ」など、きゝにくきことをさへのたま
はせければ、むつかしうわづらはしとおぼしなが
ら、さりとてまかせきこえさすべきことならね
ば、いみじういのりさはがせ給ひけり。さてやよひ
ばかりに、いとめでたきおとこみこむまれ給へり。
院いとものぐるをしきおほん心もれいざまにお
はしますときはいとうれしきことにおぼしめして、
よろづにしりあつかひきこえさせ給けり。おほき
おとゞきこしめして、「あはれめでたしや、東三条の
大将は、院の二宮えたてまつりておもひたらむ
けしきおもふこそめでたけれ」などいとをこがま
しげにおぼしの給を、大将殿は、あやしう、あや
にくなる心つい給へる人にこそ、やすからず
ぞおぼしける。かゝる程に内もやけぬれば、みかど
のおはしますところ見ぐるしとて、ほり川殿を
いみじうつくりみがき給て、だいりのやうにつく
りなして、内いでくるまではおはしまさせんと



いそがせ給ふなりけり。貞元二年三月廿六日堀
河院に行幸あるべければ、天下いそぎみちたり。
その日になりてわたらせ給ふ。中宮もやがて
その夜うつりおはしまして、堀河院を今内裏
といひて、世にめでたうのゝしりたり。かゝる程に、
大とのおぼすやう、世の中もはかなきに、いかでこの
右大臣いますこしなしあげて、わがかはりの
そくをもゆづらんと覚したちて、たゞ今の左大臣
兼明のおとゞときこゆるえんぎのみかどのおほん
十六のみやにおはします、それおほん心ちなやまし
げなりときこしめして、もとのみこになしたて
まつらせ給ひつ、さて左大臣には小野宮のより
たゞのおとゞをなし奉り給ひつ。右大臣には
まさのぶの大納言なり給ぬ。かゝる程に、堀川殿
おほん心ちいとなやましうおぼされて、御心のうちに
覚しけるや、いかでこの東三条の大将、わがいのち
もしらず、なきやうにしなして、この左のおとゞを
わがつぎの一の人にてあらせんとおぼす心ありて、
みかどにつねに「この右大将かねいゑは、冷泉院の
みこをもち奉りて、ともすればこれをこれをといひ
おもひ、いのりすること」ゝいひつげ給ひて、みかど
は堀河院におはしましければ、われはなやまし

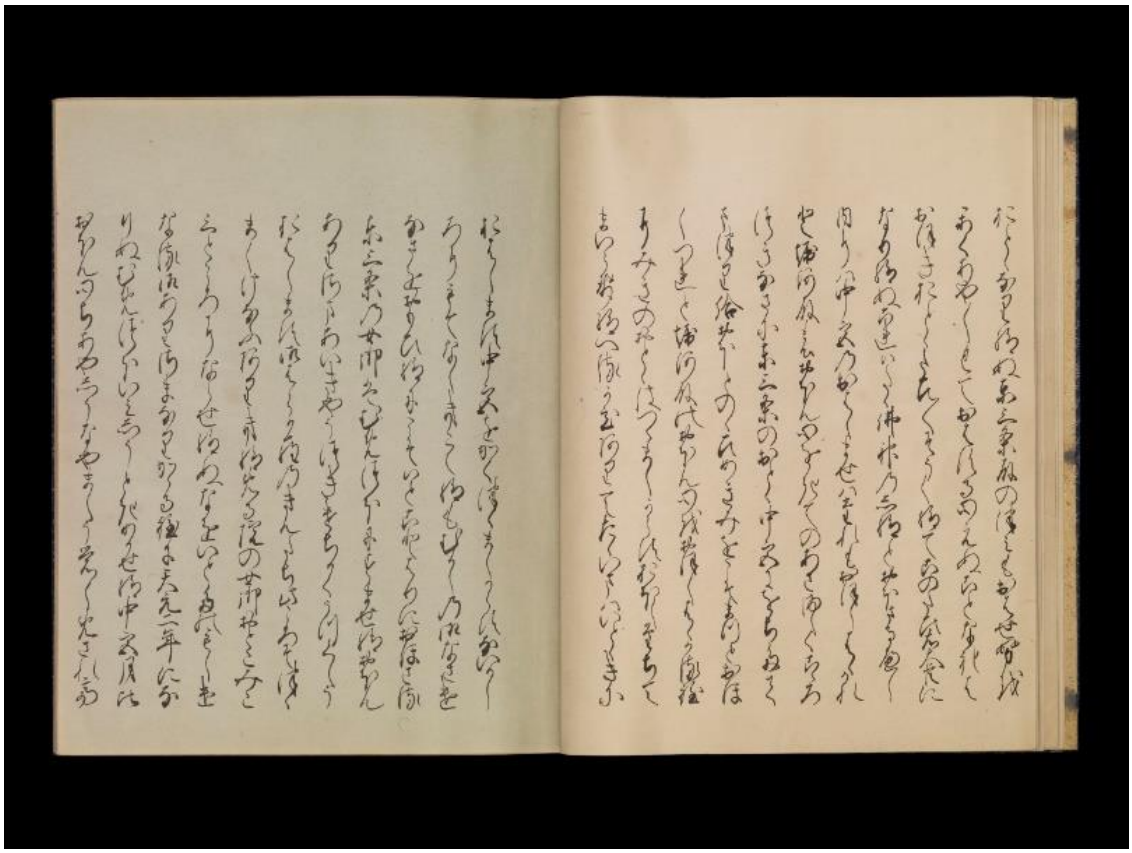


とてさとにはおはしますに、わりなくてまいらせ給て、この東三条の大将のふのうをそうし給て、「かゝる人はよにありてはおほやけの御ために大事いでき侍りなん。かやうのことはいましめたるこそよけれ」などそうし給て、貞元二年十月十一日大納言の大将をとりたてまつり給て、治部卿になしたてまつり給へり。無官の定にになしきこえまほしけれど、さすがにそのことゝさしたることのなければ、おぼしあまりてかくまでもなしきこえ給へるなりけり。おほん心のまゝにだにあらば、いみじきつくし九こくまでもとおぼせど、あやまちなければなりけり。おほんかはりの大将には、小一条のおとゞの御このなりときの中納言なり給ぬ。東三条の治部卿は、御門とぢて、あさましういみじきよの中をねたうわりなくおぼしむせびたり。いゑのこの君だちいでまじらひ給はず、世をあさましきものにおぼされたり。かゝる程は、堀河殿、おほん心ちいとゞをもりて、たのもしげなきよしをよにまうす。さいつころうちにまいらせ給て、東三条の大将をばなくなしたてまつり給てき、いまひとたびとて、内にまいらせ給ひて、よろづをそうしかためていでさせ給にけり。なにごとならん

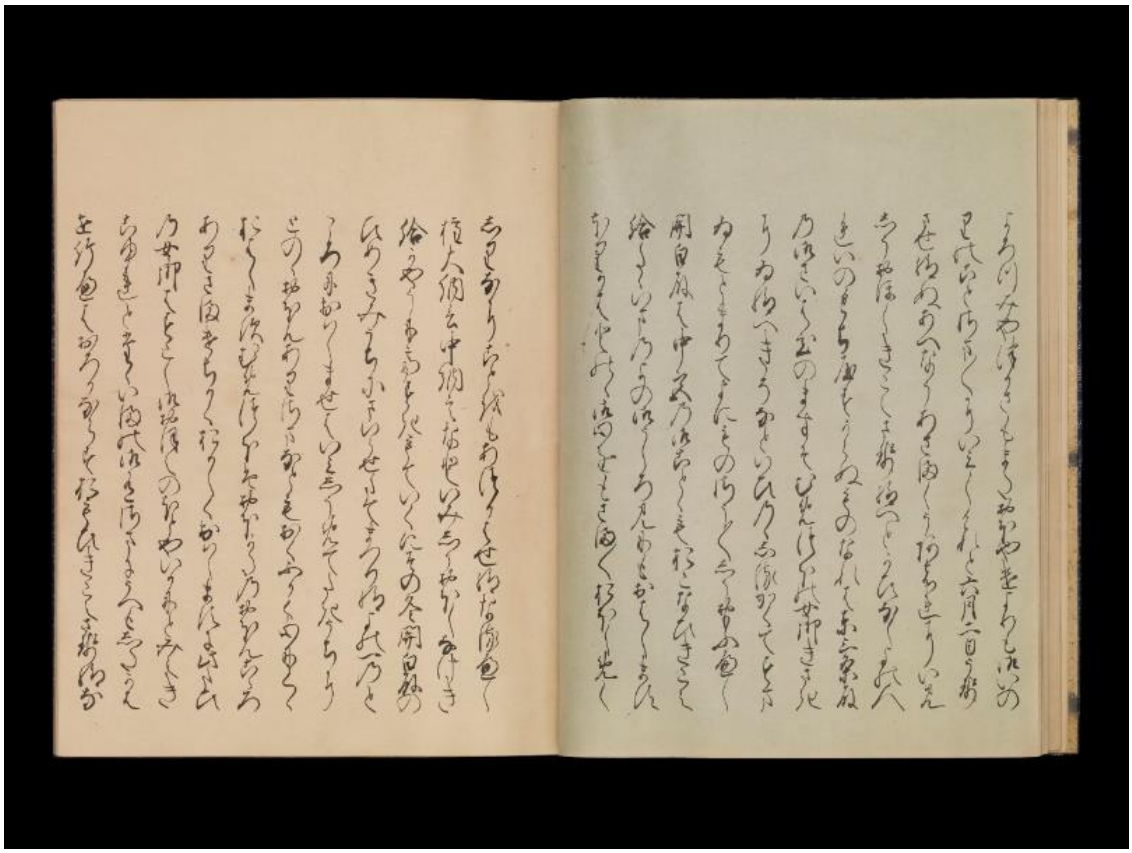


とゆかしけれど、またをとなし。かくて十一月四日
准三宮のくらゐにならせ給ぬ。おなじ月八日う
せ給ぬ。おほんとし五十三なり。たゞよしこうと
御いみなをきこゆ。あはれにいみじ。かくいくばくも
おはしまさゞりけるに、東三条の大納言をあさま
しうなげかせたてまつり給ひけるもこゝろうし。
をのゝみやのよりたゞのおとゞに世はゆづるべきよし
一日そうし給しかば、そのまゝにとみかど覚しめ
して、おなじ月の十一日、関白のせんじかうぶり給て、
世の中みなうつりぬ。あさましくおもはずなる事
に、よの中おもへり。中宮よろづにおぼしなげく。

ともみつの権大納言、あきみつの中納言など、哀に
おぼしまどふ。東三条殿の院の女御は、こぞむま
れ給しおとこみこに、またことしもさしつゞき
ておなじやうにてむまれ給へるにつけても、
なをいと行すゑたのもしげに見えさせ給。堀川
殿ののちのちのことゞもれいのごとし。かくてとし
もかはりぬ。左のおとゞの御さまいといとめでたし。おほ
ひめぎみをいかで内にまいらせ奉らんとおぼす。
はかなくて月日もすぎて冬になりぬ。ねんかう
かはりて天元々年といふ。十月二日除目ありて、関
白殿、太政大臣にならせ給ぬ。左大臣にまさのぶの

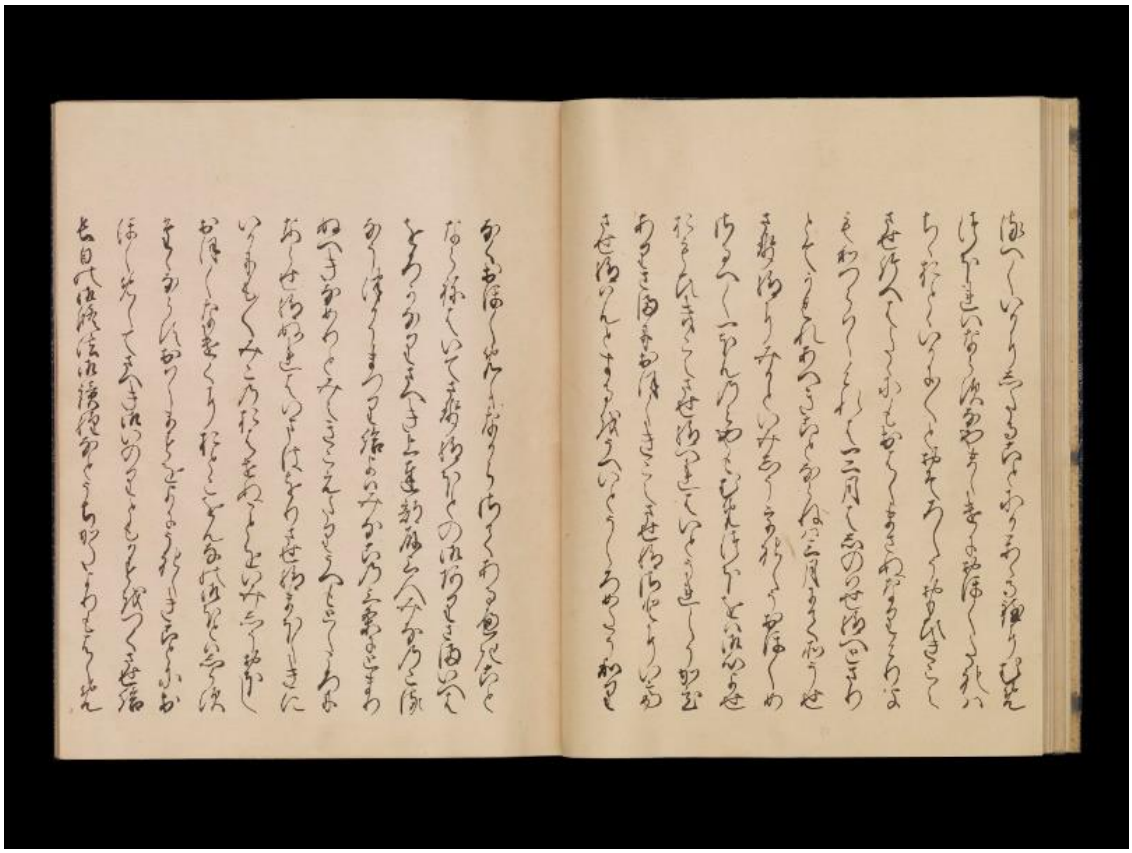


おとゞなり給ぬ。東三条殿の、つみもおはせぬを、かくあやしくておはする、心えぬことなれば、おほきおとゞたびたびそうし給て、このたび右大臣になり給ぬ。これはたゞ佛神のし給とおぼさるべし。内には中宮のおはしませば、たれもおぼしはゞかれど、堀河殿のおほん心をきてのあさましくこゝろづきなさに、東三条のおとゞ、中宮にをぢたてまつり給。おほとのゝ、ひめぎみをこそ、まづとおぼしつれど、堀河殿のおほん心をおぼしはゞかる程に、みぎのおとゞはつゝましからずおぼしたちて、まいらせ給へるかひありて、たゞいまはいとゝきにおはします。中宮をかくつゝましからず、ないがしろにもてなしきこえ給も、むかしの御なさけなさをおもひ給にこそはと、ことはりにおぼさる。東三条の女御はむめつぼにすませ給。おほんありさま、あいぎやうづきけぢかくうつくしうおはします。御はらからのきんだち此ごろぞつゝましげなふありき給める。院の女御、おとこみこ三ところにならせ給ぬ。なをいとたのもしげなる御ありさまなり。かゝる程に天元二年になりぬ。むめつぼいみじうときめかせ給。中宮月頃おほん心ちあやしうなやましう覚しめされて、

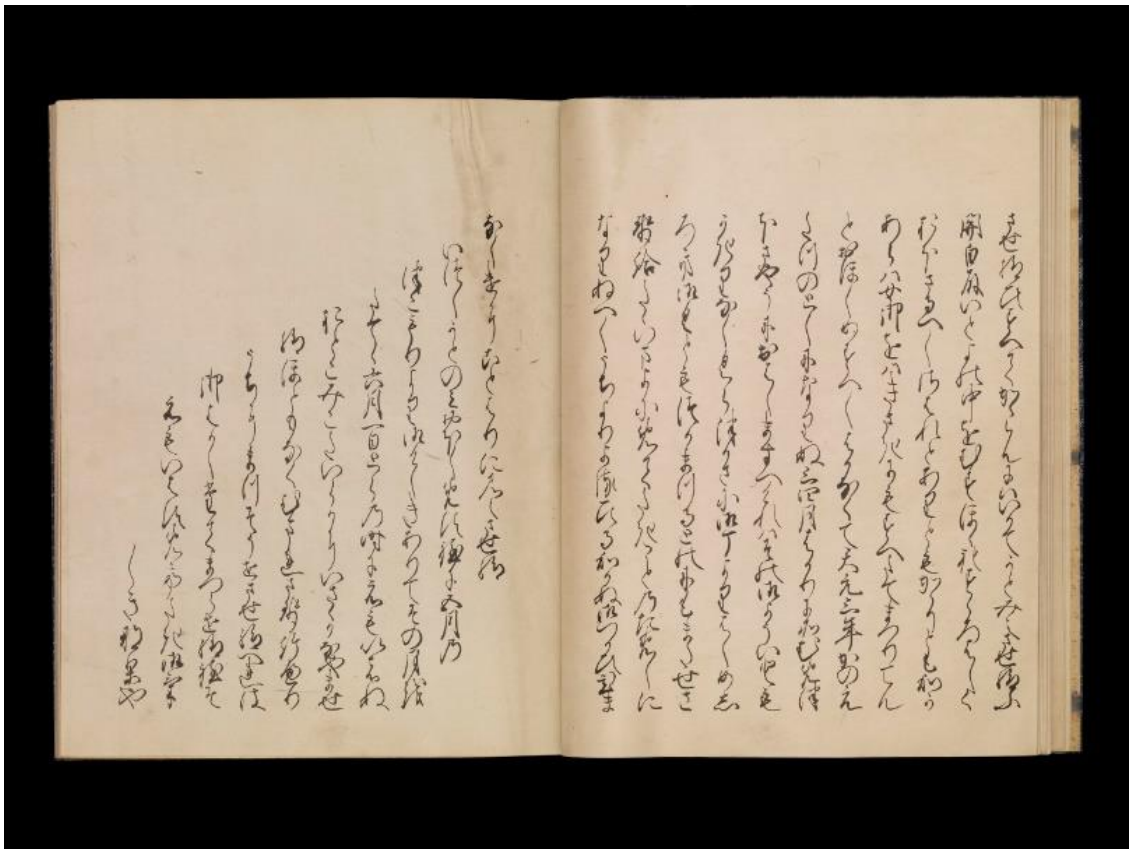


よろづみやづかさも、またおほやけよりも、御いのりのことさまざまにいみじけれど、六月二日うせさせ給ぬ。あへなう、あさましうあはれにいみじうおぼしきこえさせ給へどかひなし。よの人れいのくちやすからぬものなれば、「東三条殿の御さいはひもますぞ」「むめつぼの女御きさきにゐ給べきぞ」などいひのゝしる。かくてすまゐもとまりて、よにものさうざうしうおもふべし。関白殿は中宮の御ことゞもおこなひきこえ給。たゞいまのよの御うしろみにもおはします、ほりかはどのゝ御心をもさまざまおぼしめし

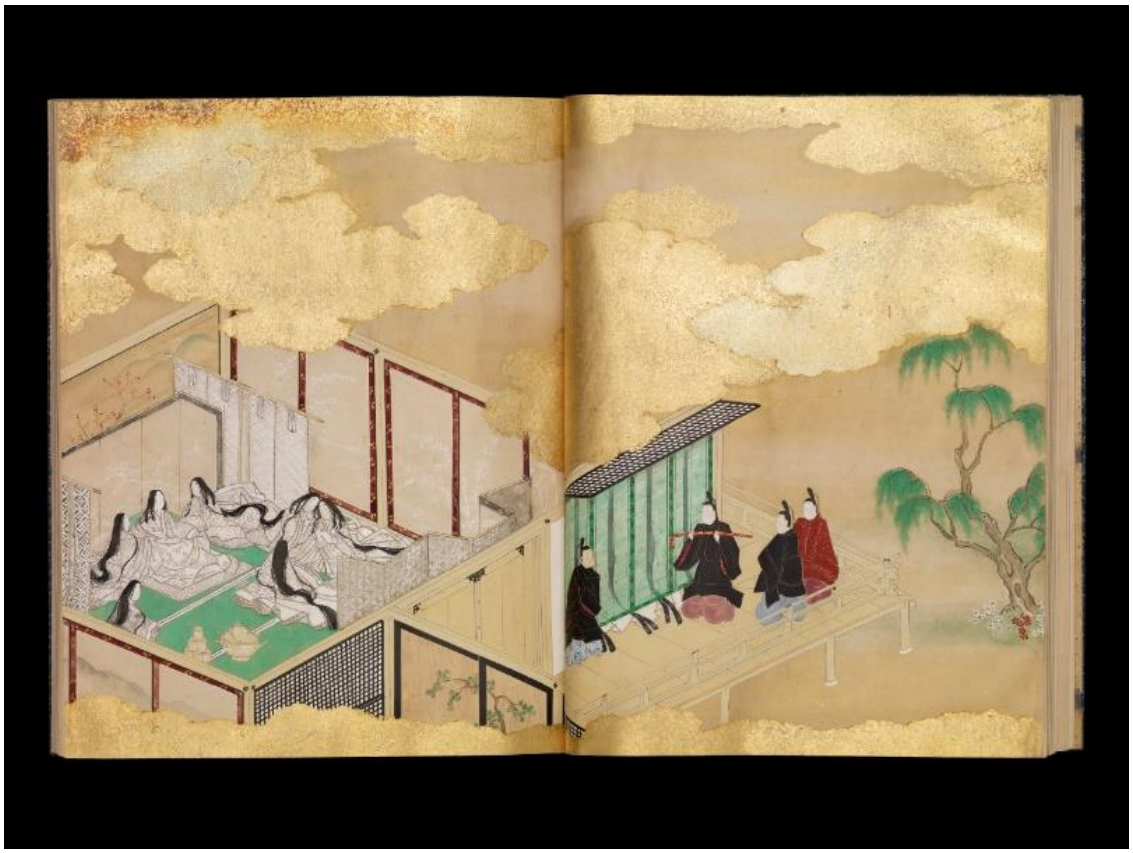
しり、なにごとをもあつかはせ給なるべし。権大納言、中納言などいみじうおぼしなげき給。かやうにてすぎもていくに、その冬、関白殿のひめぎみうちにまいらせたてまつり給。よの一のところにおはしませば、いみじうめでたきうちに、とのゝおほんありさまなどもおくふかく心にくゝおはします。むめつぼはおほかたのおほんこゝろありさまけぢかくおかしくおはしますに、此たびの女御はすこし御おぼえのほどやいかにとみえきこゆれど、たゞいまの御有さまにうへもしたがはせ給へば、おろかならずおもひきこえさせ給な

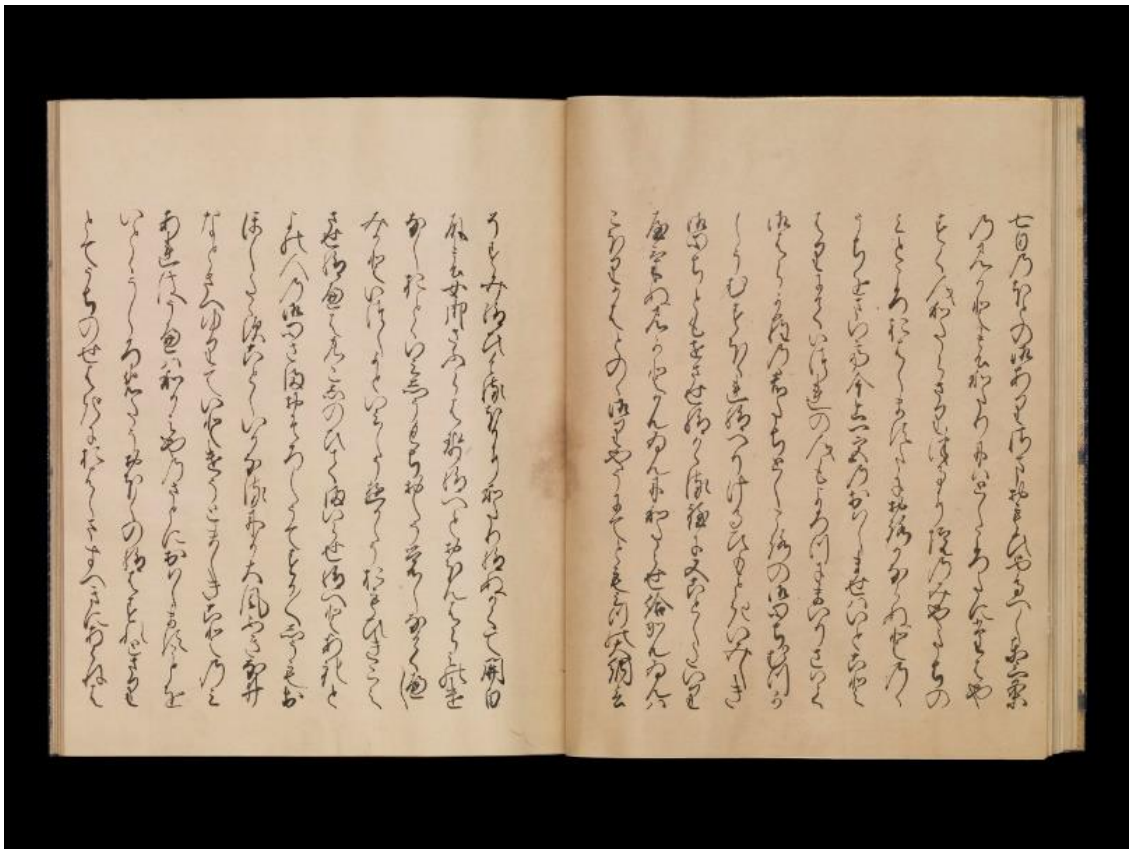


るべし。いかにしたることにか、かゝる程にむめつぼれいならずなやましげにおぼしたれば、ちゝおとゞいかにいかにとおそろしうおもひきこえさせ給へば、たゞにもおはしまさぬなりけり。よもわづらはしければ、一二月はしのばせ給へど、さりとてかくれあべきことならねば、三月にてそうせさせ給に、みかどいみじううれしうおぼしめさるべし。一ぽんのみやも、むめつぼをば御心よせおもひきこえさせ給へれば、いとうれしうかひありさまにおぼしきこえさせ給。さとにいでさせ給はんとするを、うへいとうしろめたうわりなくおぼしめしながら、さてあるべきことならねば、いでさせ給ほどの御ありさまいへばをろかなり。さべき上達部、殿上人みなのこるなうつかうまつり給。よはみなこの三条にとまりぬべきなめりとみえきこえたり。うへもとしごろにならせ給ぬれば、いまはをりさせ給まほしきに、いかにもいかにもみこのおはせぬことをいみじうおぼしなげくに、おとこ、をんなの御ほどはしらず、たゞならずおはしますをよにうれしきことにおぼしめして、さべき御いのりどもかずをつくさせ給。長日の御修法、御読経などうちがたよりもはじめ

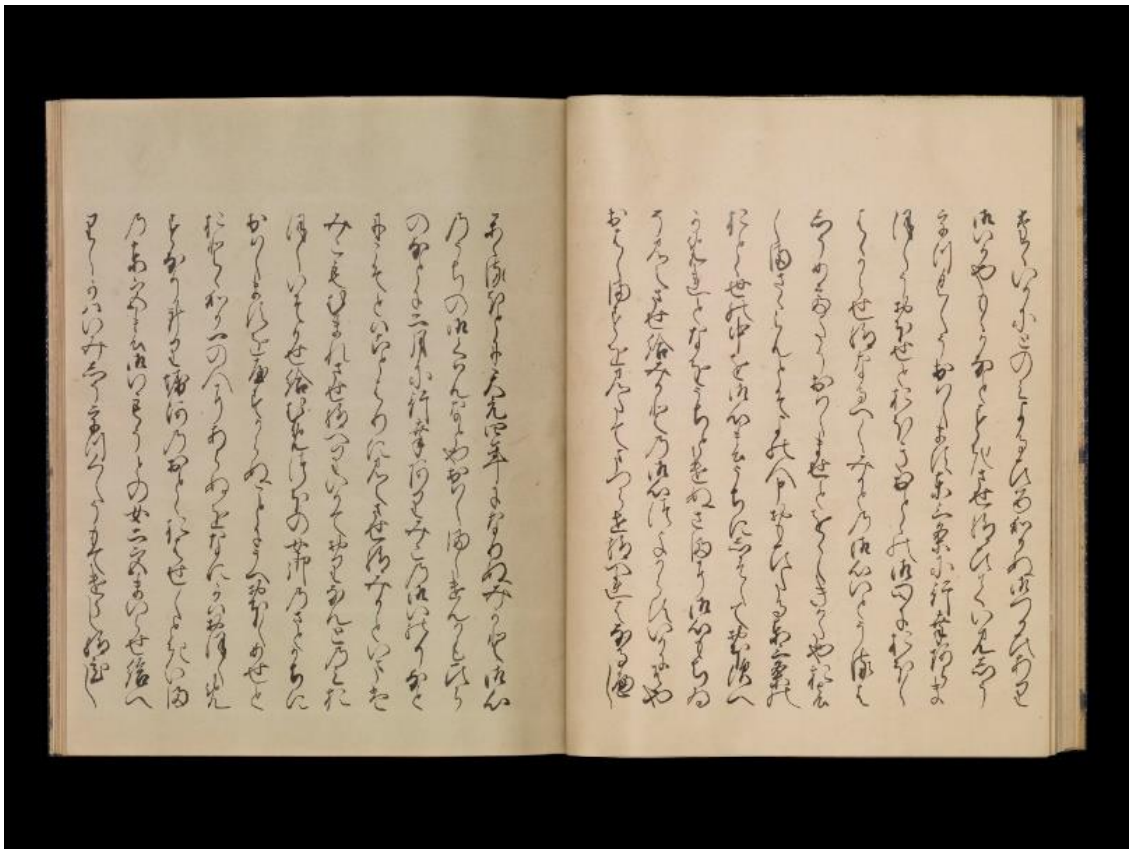


させ給ひ、すべてかゝらんにはいかでかとみえさせ給ふ。
関白殿、いとよの中をむすぼゝれ、すゞろはしく
おぼさるべし。さはれ、とありともかゝりとも、わが
あらば女御をばきさきにもすへたてまつりてん
とおぼしめすべし。はかなくて天元三年かのえ
たつのとしになりぬ。三四月ばかりにぞ、むめつ
ぼさやうにおはしますべければ、その御よういども
かぎりなし。くらづかさに御丁よりはじめ、し
ろき御ぐどもつかまつる。とのにもまたせさ
せ給。たゞいまよにめでたきことのためしに
なりぬべし。うちよりよるひるわかぬ御つかひひま
なし。げにことはりに見えさせ給。
いそしかとのみおぼします程に、五月の
つごもりより御けしきありて、その月を
たてゝ六月一日とらの時に、えもいはぬ
おとこみこたいらかに、いさゝかなやませ
給ほどもなくむまれさせ給へり。
うちにまづそうせさせ給へれば、
御はかしたてまつらせ給程ぞ、
えもいはずめでたき御け
しきなりや。



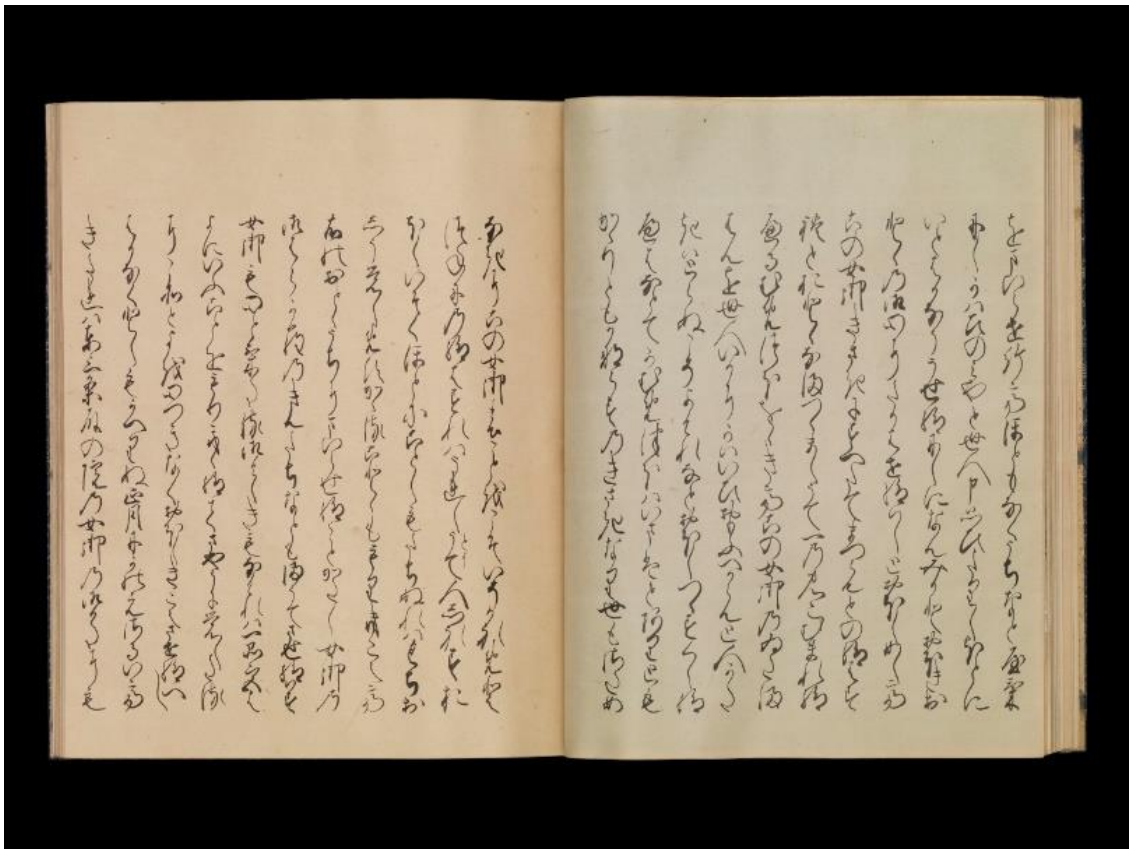


七日のほどの御ありさまおもひやるべし。東三条のみかどのわたりには、としごろだにたはやすく人わたらざりつるに、院のみやたちのみところおはしますだにおろかならぬとのゝうちを、まいて今上一宮のおはしませば、いとことはりにて、いづれの人もよろづにまいりさはぐ。御はらからの君だち、としごろの御心ちむつかしうむすぼゝれ給へりける。ひもとき、いみじき御心ちどもせさせ給。かゝる程に、又ことしだいりやけぬ。みかど、かんゐんにわたらせ給。かんゐんはこほりかはどのゝ御りやうにて、ともみつの大納言ぞすみ給ひける。ほかにわたり給ぬ。かくて関白殿の女御さぶらはせ給へど、おほんはらみのけなし。おとゞいみじうくちおしう覚しなげくべし。みかど、いつしかといみじうゆかしうおもひきこえさせ給へば、「みこしのびてまいらせ給へ」とあれど、よの人の御心ざまおそろしうて、すがすがしうもおぼしたゝず。ことしいかなるにか大風ふき、ないなどさへゆりて、いとけうとましきことのみあれば、うへはわかみやのさとにおはしますことをいとどうしろめてうおぼしの給はすれど、さりとてうちのせばきにおはしますべきにあらねば、

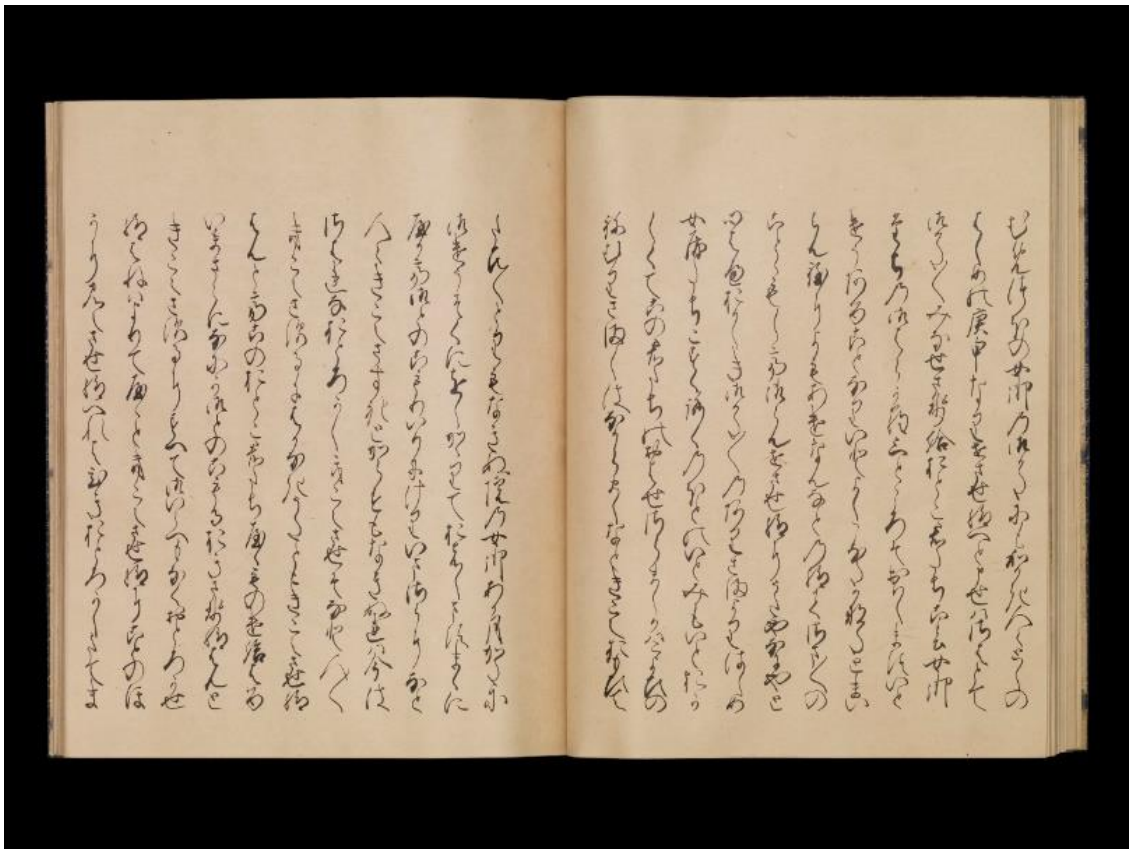


たゞいかにとのみよるひるわかぬ御つかひあり。御いかやもゝかなどすぎさせ給ひて、いみじううつくしうおはします。東三条に行幸あらまほしうおぼせど、おほきおとゞの御心におぼしはゞからせ給なるべし。みかどの御心いとうるはしうめでたうおはしませど、をゝしきかたやおはしまさゞらんとぞ、よの人申おもひたる。東三条のおとゞ、世の中を御心のうちにしそしておぼすべかめれど、なをうちとけぬさまに御心もちゐぞみえさせ給。みかどの御心つよからず、いかにぞやおはしますを見たてまつらせ給へればなるべし。

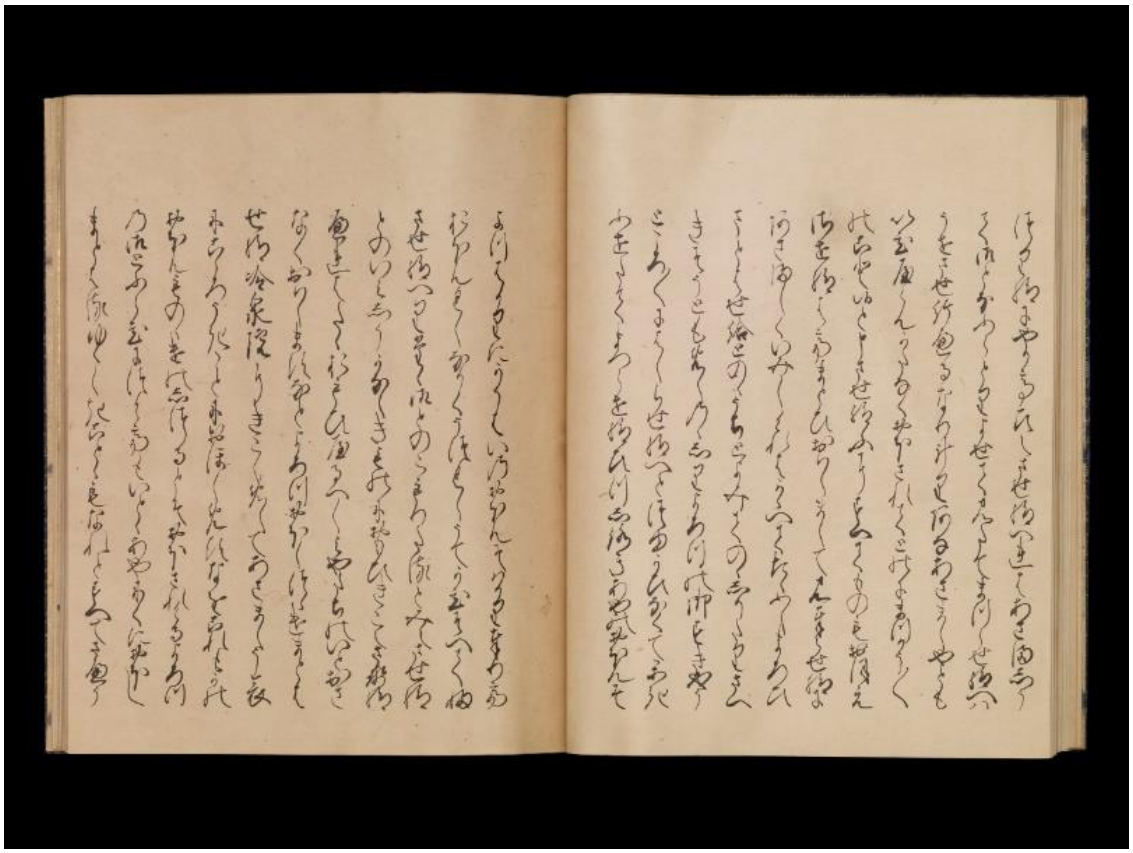
かゝるほどに天元四年になりぬ。みかど、御心のうちの御ぐはんなどやおはしましけん。かも、ひらのなどに、二月に行幸あり。みこの御いのりなどにこそとは、ことはりに見えさせ給。みかど、いまはみこもむまれさせ給へり。いかでおりなんとのみおぼしいそがせ給。むめつぼの女御のさとがちにおはしますを、やすからぬことにうへおぼしめせど、おとゞわが一の人にあらぬを、なにかはおぼしめすなりけり。堀河のおとゞおはせしとき、いまの東宮の御いもうとの女二宮まいらせ給へりしかば、いみじううつくしうもてけらし給ひし



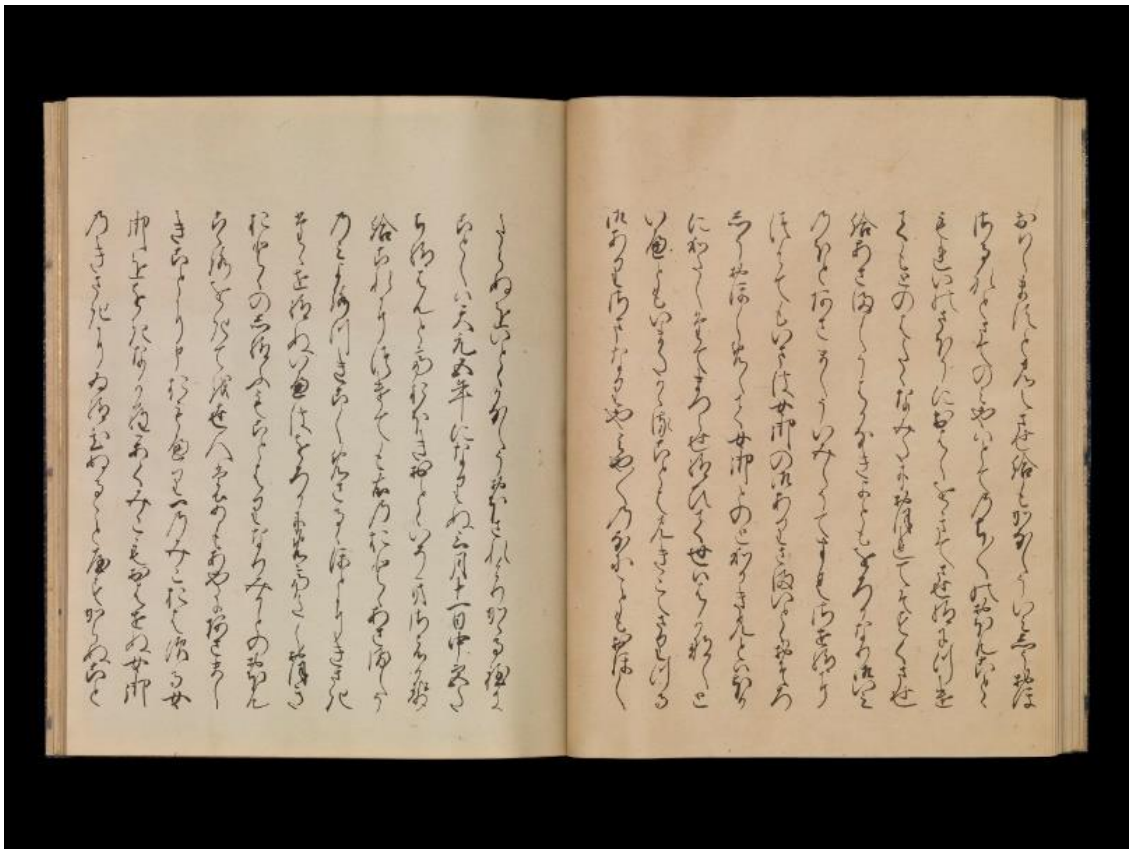
を、まいらせ給てほどもなく、うちなどやけにしかば、「ひのみや」と世人申思ひたりしほどに、いとはかなううせ給にしになん。みかど、おほきおとゞの御心にたがはせ給はじとおぼしめして、「この女御きさきにすへたてまつらん」との給はすれどおとゞ、なまつゝましうて、一のみこむかれ給へるむめつぼをゝきて、この女御のゐたまはんを、世人いかにかはいひおもふべからんと、人がたきはとらぬこそよけれなど、おぼしつゝすぐし給へば、「などてか。むめつぼはいまはとありともかゝりとも、かならずのきさきなり。世もさだめなきに、この女御のことをこそいそがれめ」と、つねにの給はすれば、うれしう（とイ）て人しれずおぼしいそぐほどに、ことしもたちぬれば、くちおしう覚しめす。かゝることゞももりきこえて、右のおとゞうちにまいらせ給ことかたし。女御の御はらからのきんだちなどもまうてさせ給はず。女御も心とけたる御けしきもなければ、一品宮はよにいふことをもりきゝ給て、さやうに覚したるにこそと、よを心づきなくおぼしきこえさせ給べし。はかなくとしもかへりぬ。正月にかのえさるいできたれば、東三条殿の院の女御の御かたにも、



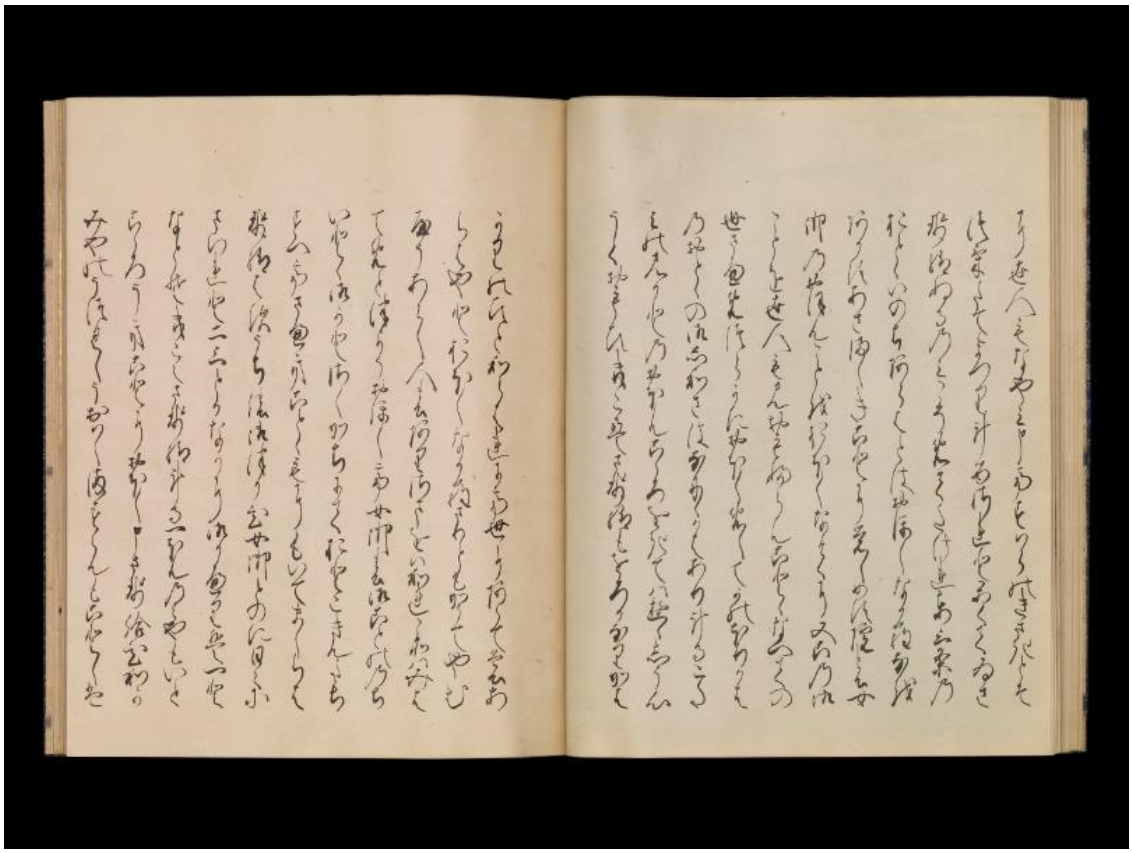
むめつぼの女御の御かたにも、わかき人々、「としのはじめの庚申なり。せさせ給へ」と申せば、さはとて御かたがたみなさせ給。おとこ君だち、この女御たちの御はらから三ところぞおはします。「いとけうあることなり」「いとよし」「こなたかなたとまいらん程によもあけなん」などの給て、さまざまのことゞもして御らんぜさせ給に、うたやなにやと、心ばへおかしき御かたがたのありさまよりはじめ、女房たち、ご、すごろくのほどのいどみもいとおかしくて、「この君だちのおはせざらましかば、こよひのねむりさましはなからまし」などきこえおもひて、たびたびとりもなきぬ。院の女御、あか月がたに御けうそくにをしかゝりておはしますまゝに、やがて御とのごもりいりにけり。「いまさらに」など人々きこえさすれど「からすもなきぬれば、今はさはれ、なおどろかしきこえさせそ」など、人々きこえさするに、はかなきうたどもきこえさせ給はんとて、このおとこ君だち、「やゝ、ものけ給はる。いまさらになにか御とのごもる。おきさせ給はん」ときこえさするに、すべて御いらへもなくおどろかせ給はねば、よりて、「やゝ」ときこえさせ給に、ことのほかに見えさせ給へれば、ひきおどろかしたてま



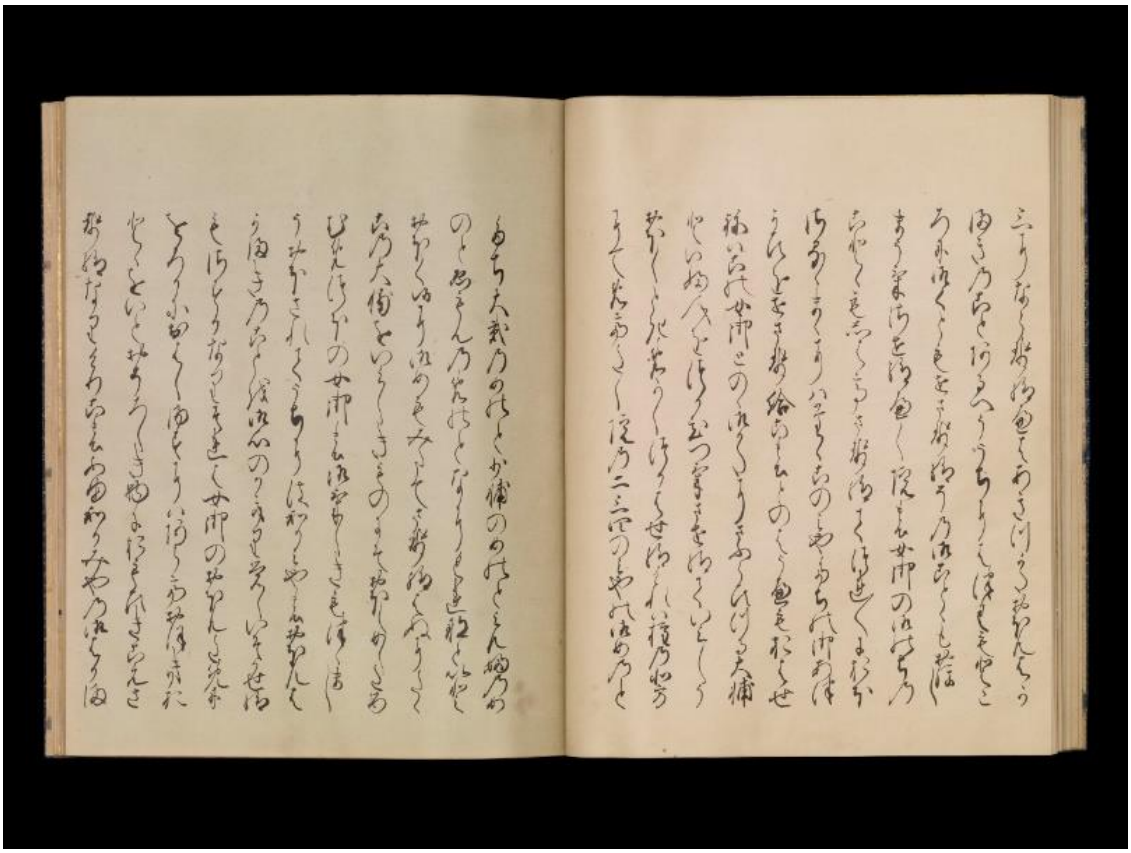
つり給に、やがてひえさせ給へれば、あさましうて、御となぶらとりよせて見たてまつらせ給へば、うせさせ給へるなりけり。あなあさましやともいひやらんかたなくおぼされて、とのにまづ「かうかうのこと候」と申させ給ふに、すべてものもおぼえさせ給はで、まどひおはしまして見奉らせ給に、あさましくいみじければ、かゝへてたゞふしまろびまどはせ給。とのゝうちどよみてのゝしりたり。さべきそうどもめしのゝしり、よろづの御ずきやうところどころにはしらせ給へど、つゆかひなくて、かきふせたてまつらせ給ひつ。しろきあやのおほんぞよつばかりにかうばいのおほんぞばかり奉りて、おほんぐしながくうつくしうて、かひそへてふさせ給へり。たゞ御とのごもりたるとみえさせ給。とのいみじうかなしきものにおもひきこえさせ給へれば、たゞおもひやるべし。みやたちのいとおさなくおはしますなど、よろづおぼしつゞけまどはせ給。冷泉院にきこしめして、あさましう哀にこゝろうきことにおぼしめす。なをこれもかのおほんものゝけのしつるとぞ、おぼされける。よろづの御とぶらひにつけても、いとゞあやにくにおぼしまどはる。ゆゝしきことゞもなれど、すべてさべう



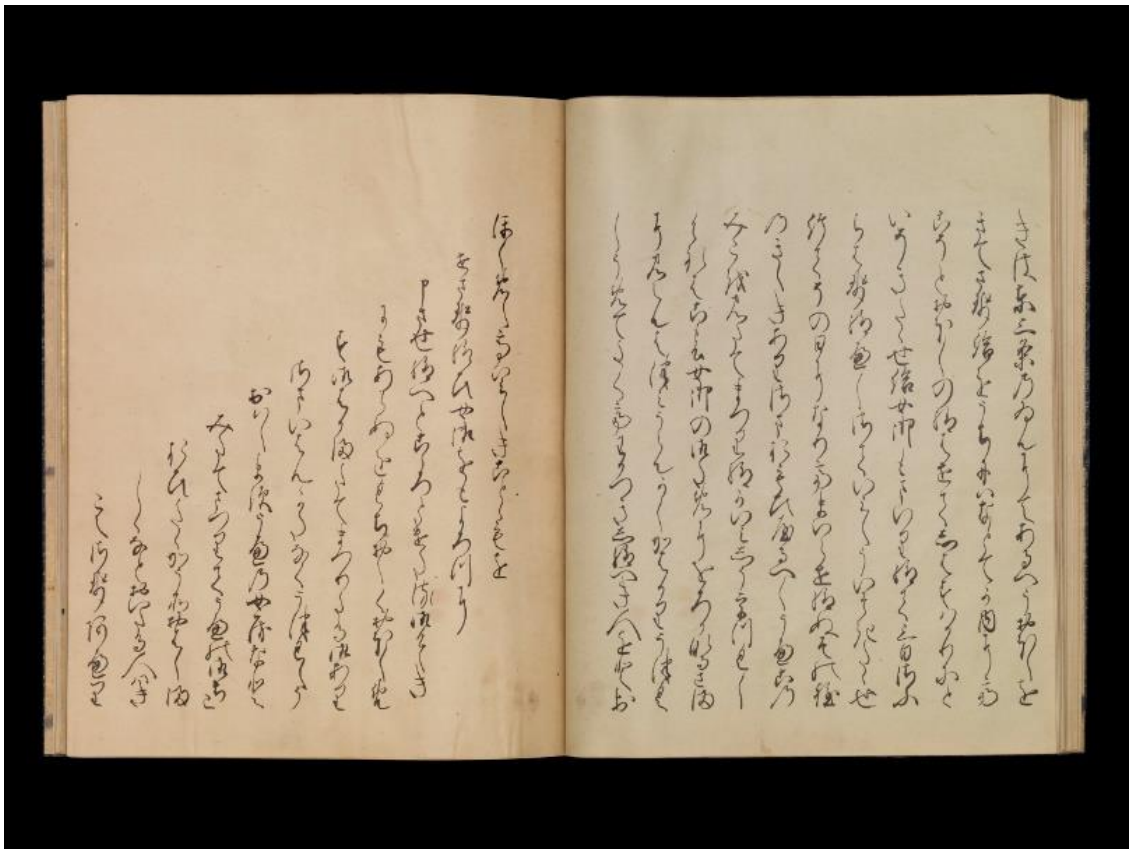
おはしますと見えさせ給もかなしういみじうおぼ
さるれど、さてのみやはとて、のちのちのおほんことゞ
もれいのさほうにおはしをきてさせ給につけ
ても、とのはたゞなみだにおぼれてぞすぐさせ
給。あさましうはかなきよともをろかなり。御いみ
のほどあさましういみじうてすぐさせ給に
つけても、いまは女御の御ありさまいとゞおそろ
しうおぼしめして、女御どのとわかきみとはほか
にわたしたてまつらせ給ひて、世ははかなしと
いへども、いまだかゝることは見きこえざりつる
御ありさまなりや、みやみやのなにごともおぼし
たらぬをいとゞかなしうおぼされけり。かゝる程に、
ことしは天元五年になりぬ。三月十一日中宮た
ち給はんとて、おほきおとゞいそぎさはがせ
給。これにつけても右のおとゞあさましう
のみよろづきこしめさるゝほどに、ささき
たゝせ給ぬ。いへばをろかにめでたし。おほき
おとゞのし給ふもことはりなり。みかどのおほん
こゝろをきてを、世人もめもあやにあさまし
きことに申おもへり。一のみこおはする女
御ををきながら、かくみこもおはせぬ女御
のきさきにゐ給ひぬること、やすからぬこと



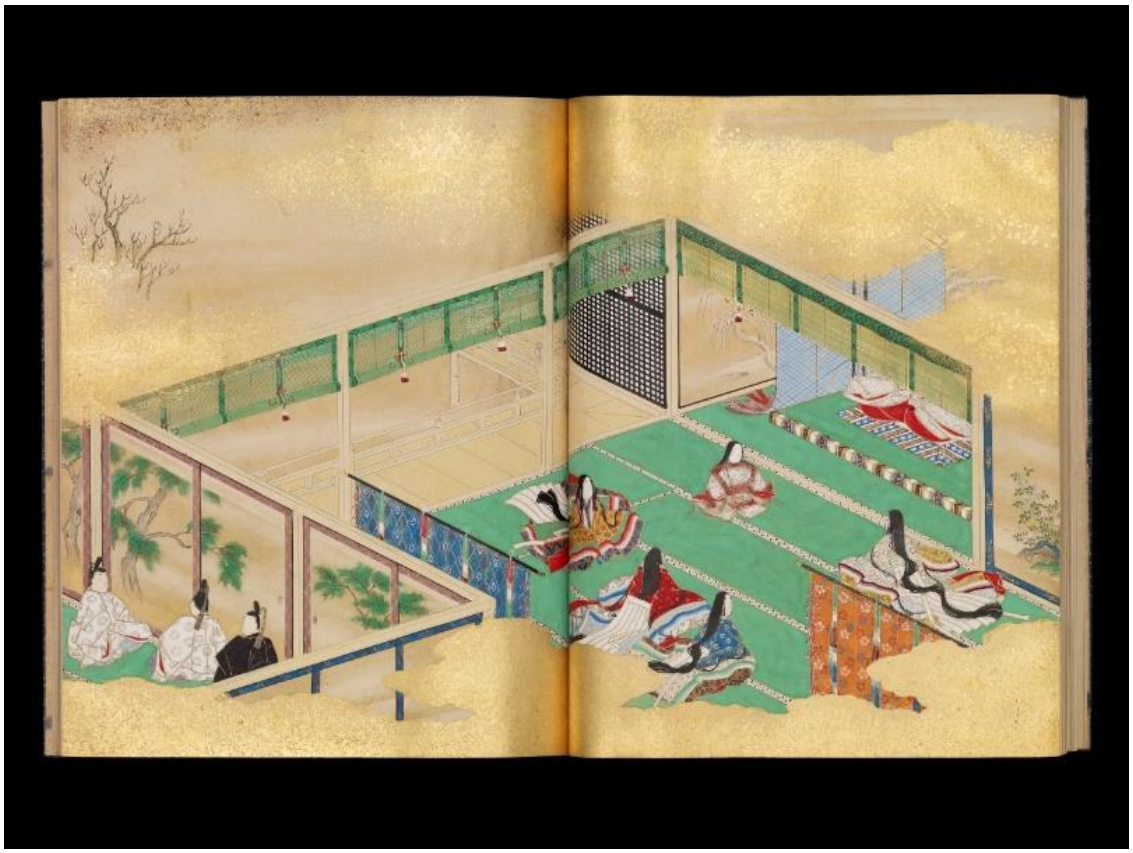
に世人もなやみ申て、すばらのきさきとぞ
つけたてまつりける。されどかくてゐさ
せ給ぬるのみこそめでたけれ。東三条の
おとゞ、いのちあらばとおぼしながら、なを
あかずあさましきことに覚しめす。院の女
御のおほんことをおぼしなげくに、又、この御
ことを世人も見おもふらんことゝ、なべての
世さへめづらかにおぼしめして、かのほりかは
のおとゞの御しわざはなにゝかはありける、こた
みのみかどのおほんこゝろをきては、ゆゝゝしう心
うくおもひきこそさせ給もをろかなり、かば
かりのひとわらはれにて、世にあらでもあ
らばやと、おぼしながら、さりともかうてやむ
やうあらじ、人のありさまをば、われこそはみは
てめと、つようおぼして、女御の御こととのの、
いとゞ御かどさしがちにて、おとこきんだち
すべてさべきことゞもにもいでまじらは
せ給はず。うちの御つかひ、女御どのに日々に
まいれど、二三どがなかに御かへりは一ど
などぞきこえさせ給ける。一ぽんのみやもいと
こゝろうきことにおぼし申させ給ひ。わか
みやのうつくしうおはしますらんも、ことしは、

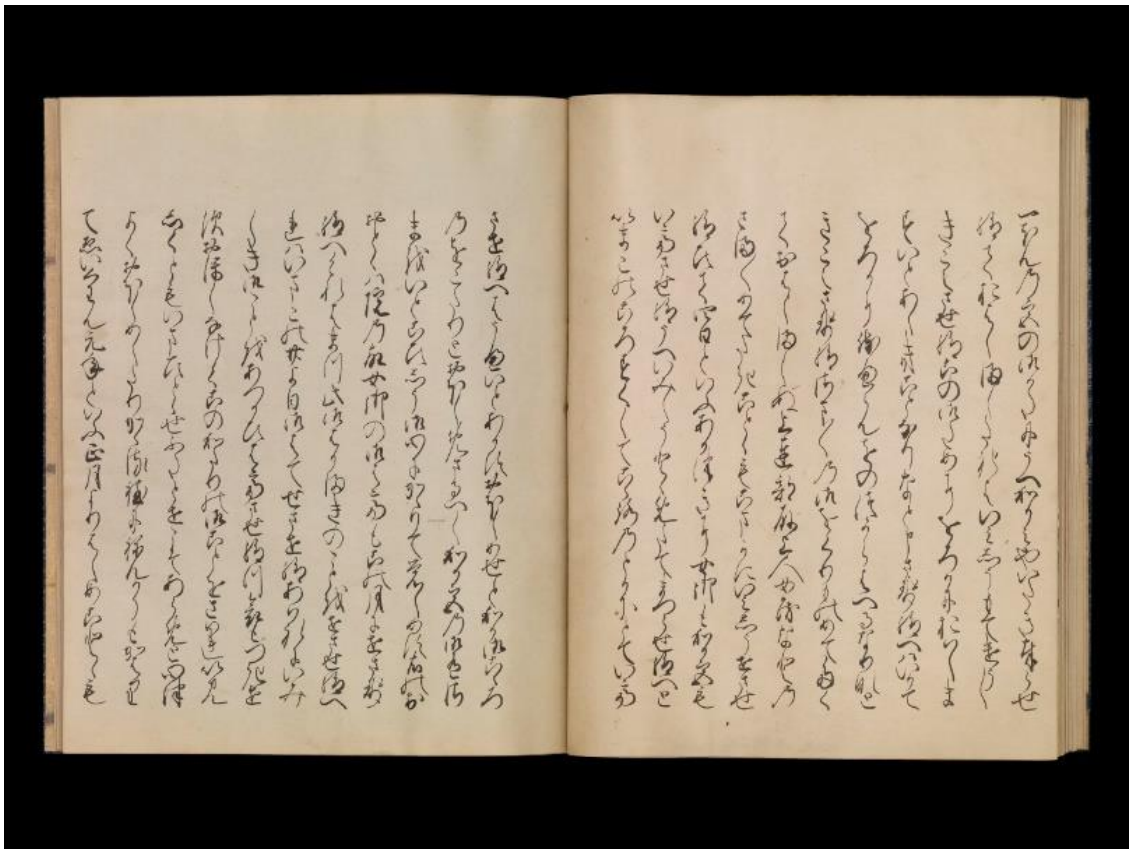


三にならせ給へば、あきつかたおほんはか
まぎのことあるべう、うちにはつくもどこ
ろに御ぐどもをさせ給、その御ことゞもおぼし
まうけさせ給べし。院の女御の御のちの
ことゞも、しはてさせ給て、つれづれにおぼ
さるゝまゝには、たゞこのみやたちの御あつ
かひをせさせ給。このとのはうへもおはせ
ねばこの女御どのゝ御かたにさぶらひつる大輔
といふ人をつかひつけさせ給て、いみじう
おぼしときめかしつかはせ給ければ、権の北方
にてめでたし。院の二、三、四のみやの御めのと
たち、大弐のめのと、少輔のめのと、みんぶのめ
のと、ゑもんのめのと、なにくれなど、いと
おほく候に、御めもみたてさせ給はぬに、たゞ
この大輔をいみじきものにぞおぼしめしたる。
むめつぼの女御の御けしきもつゝまし
うおぼされて、うちには、わかみやのおほんは
かまぎのことを、御心のかぎり覚しいそがせ給
もさすがなり。それは女御のおほんために
をろかにおはしますにはあらで、おほきお
とゞをいとおそろしき物におもひきこえさ
せ給なりけり。このふゆ、わかみやの御はかま

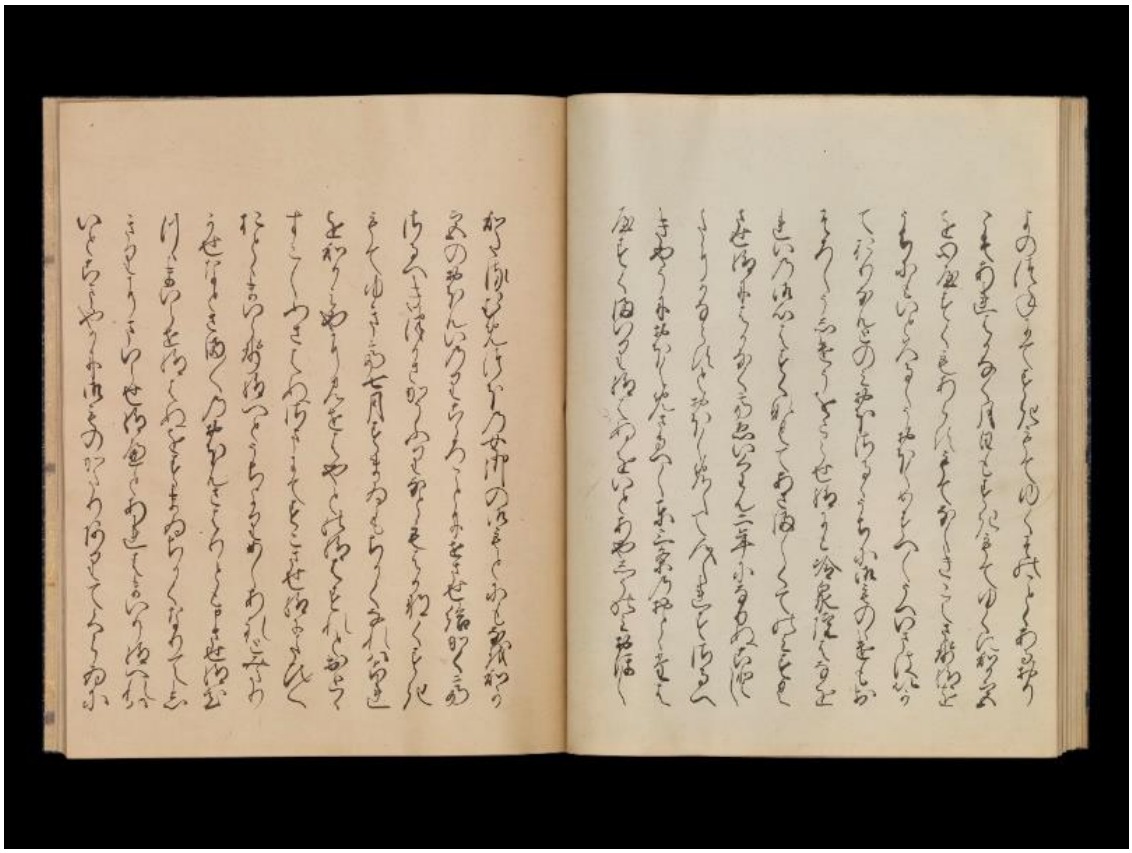


ぎは、東三条のゐんにてあるべうおぼしを
きてさせ給を、うちには「などてか。内にて
こそ」とおぼしの給はせて、しはすばかりにと
いそぎたゝせ給。女御もまいり給て三日さぶ
らはせ給べし。さていみじういそぎたゝせ
給て、その日になりてまいらせ給ぬ。その程
のぎしきありさまおもひやるべし。うへ、この
みこを見たてまつり給が、いみじううつくし
ければ、この女御の御ためにをろかなるさま
に見えんはつみうらんかし、かばかりうつく
しうめでたくてわがつぎし給べき人をと、お
ぼしめして、いみじきことゞもを
せさせ給ひ、女御をもよろづに
申させ給へど、こゝろとけたる御けしき
にもあらぬをくちおしくおぼしめ
す。御はかまたてまつりたる御あり
さま、いはんかたなくうつくしう
おはします。うへの女房など
みたてまつりて、「うへの御ちご
おひたゞかうぞおはしま
しゝ」など、おいたる人はき
こえさせあへり。

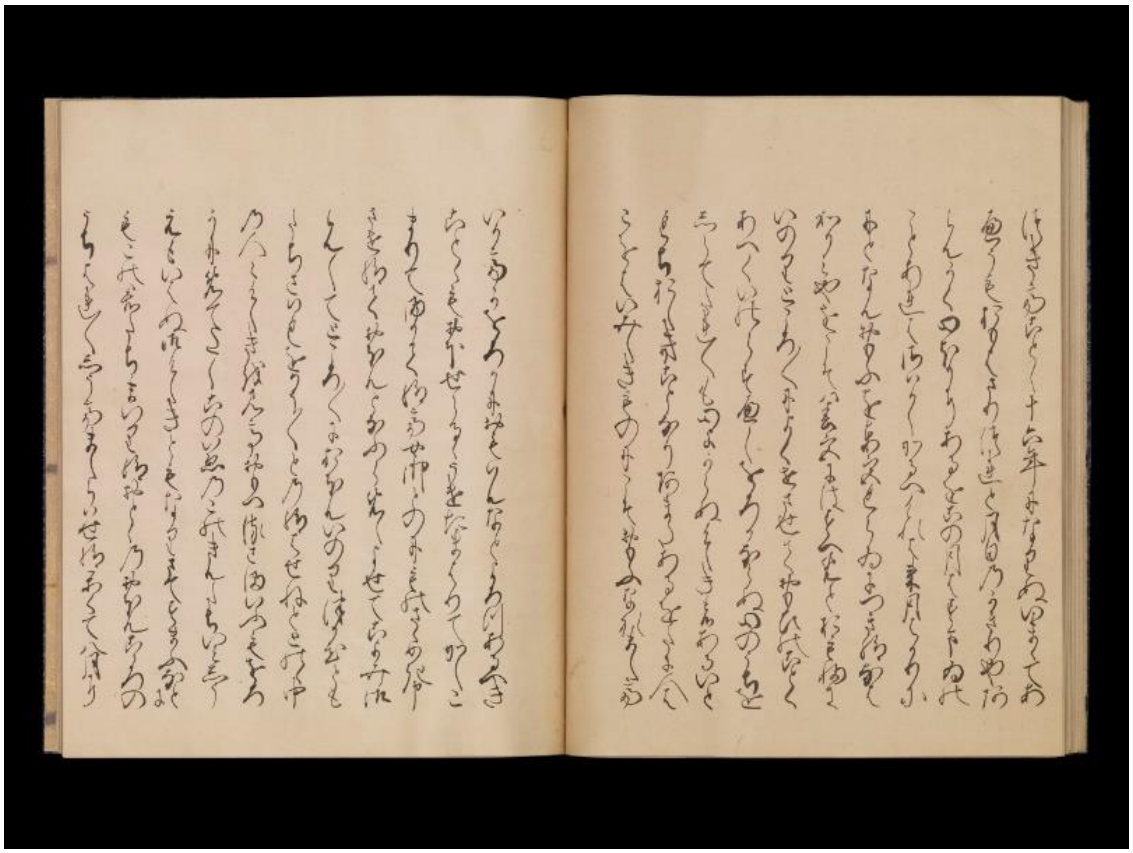




一ぽんの宮の御かたに、うへわかみやいだき奉らせ
給ておはしましたれば、いみじうもてけうじ
きこえさせ給。「この御ためにをろかにおはしま
す、いとあしきことなり」など申させ給へば、「いかで
をろかに侍べらん、をのづからはべるなり」など
きこえさせ給。さまざまの御をくりものめでたく
ておはしましぬ。上達部、殿上人、女房などの
さまざまめでたきことゞも、こまかにいみじうせさせ
給ひて、四日といふあかつきに、女御もわか宮も
いでさせ給。うへいみじうとゞめたてまつらせ給へど、
「いまこのごろすぐして、こゝろのどかに」とていで
ませ給へば、うへいとあかずおぼしめせど、わが御こゝろ
のをこたりとおぼしめさるべし。わか宮の御有さ
まをいとこひしう御心にかゝりて覚しめす。右のお
おとゞは、院の故女御の御はてもこの月にせさせ
給べければ、まづ此御はかまぎのことをせさせ給へ
れば、いまこの廿よ日、御はてせさせ給。あはれにいみ
じき御ことをあつかひはてさせ給つ。哀もつきせ
ずおぼしなげく。このわたりの御ことをさはれ、いみ
じくともいまひとゝせふたとせこそあらめと心つ
よくおぼしめしたり。かゝる程に、ねんがうもかはり
て、ゑいくわん元年といふ。正月よりはじめ、ことゞも

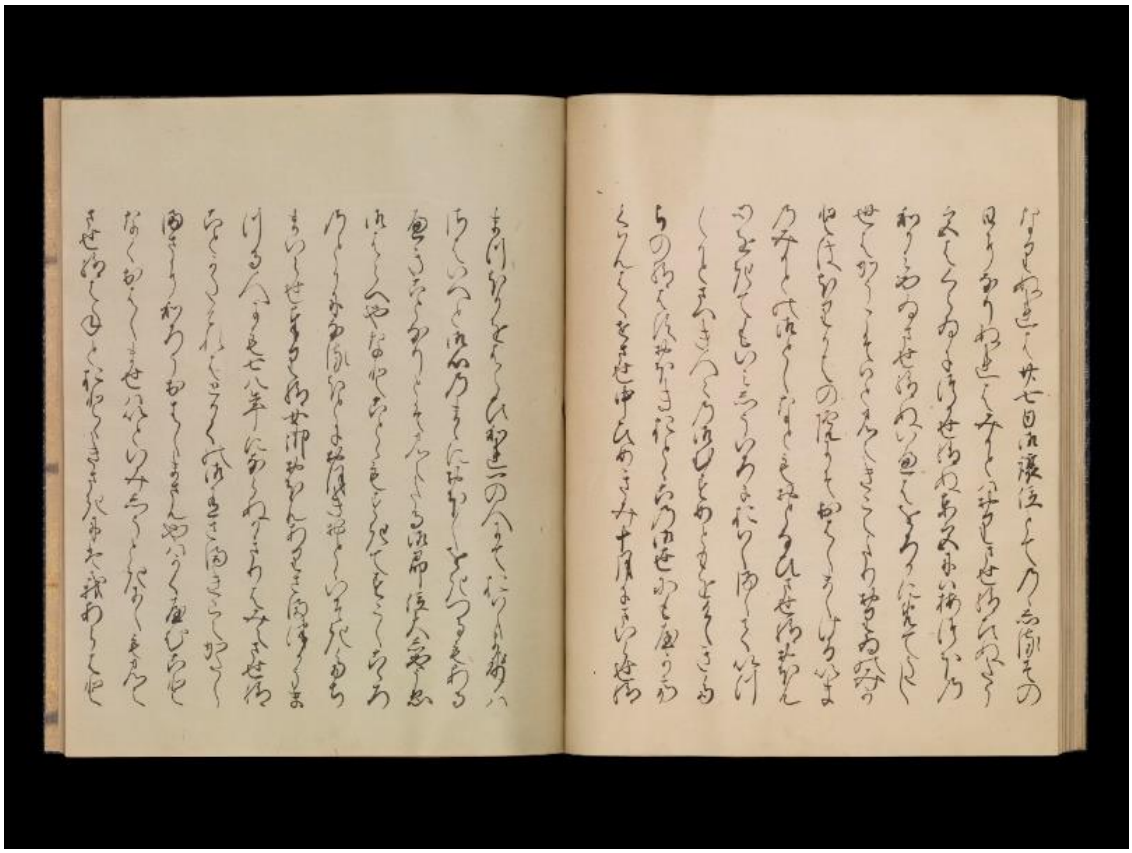


よのつねにてすぎもてゆく。そのことゝあるおり
こそあれ、はかなく月日もすぎもてゆくに、わか宮
を心やすくもあらずもてなしきこえさせ給を、
うちにもいとくるしうおぼしめすべし。うへ、いまはいか
でおりなんとのみおぼさるゝうちに、御ものゝけもお
そろしうしげうをこらせ給にも、冷泉院はなを
れいの御心はすくなくて、あさましくてのみすぐ
させ給に、はかなくてゐいくわん二年になりぬ。ことし
だにかならずとおぼしめして、人しれずさるべ
きやうにおぼしめさるべし。東三条のおとゞたは
やすくまいり給はぬを、いとあやしうのみおぼし
わたる。むめつぼの女御の御もとにも、なをわか
宮のおほんいのりこゝろことにせさせ給。かくて
さるべきつかさかうぶりなども、はかなくすぎ
もてゆきて、七月、すまゐもちかくなれば、「これ
をわかみやに見せばや」との給はすれど、おとゞ
すこしふさはぬさまにてすごさせ給にたびたび
「おとゞまいらせ給へ」とうちよりめしあれどみだり
かぜなどさまざまのおほんさはりども申させ給ひ
つゝ、まいらせ給はぬを、すまゐちかくなりて、し
きりに「まいらせ給へ」とあれば、まいり給へれば、
いとこまやかに御ものがたりありて、「くらゐに

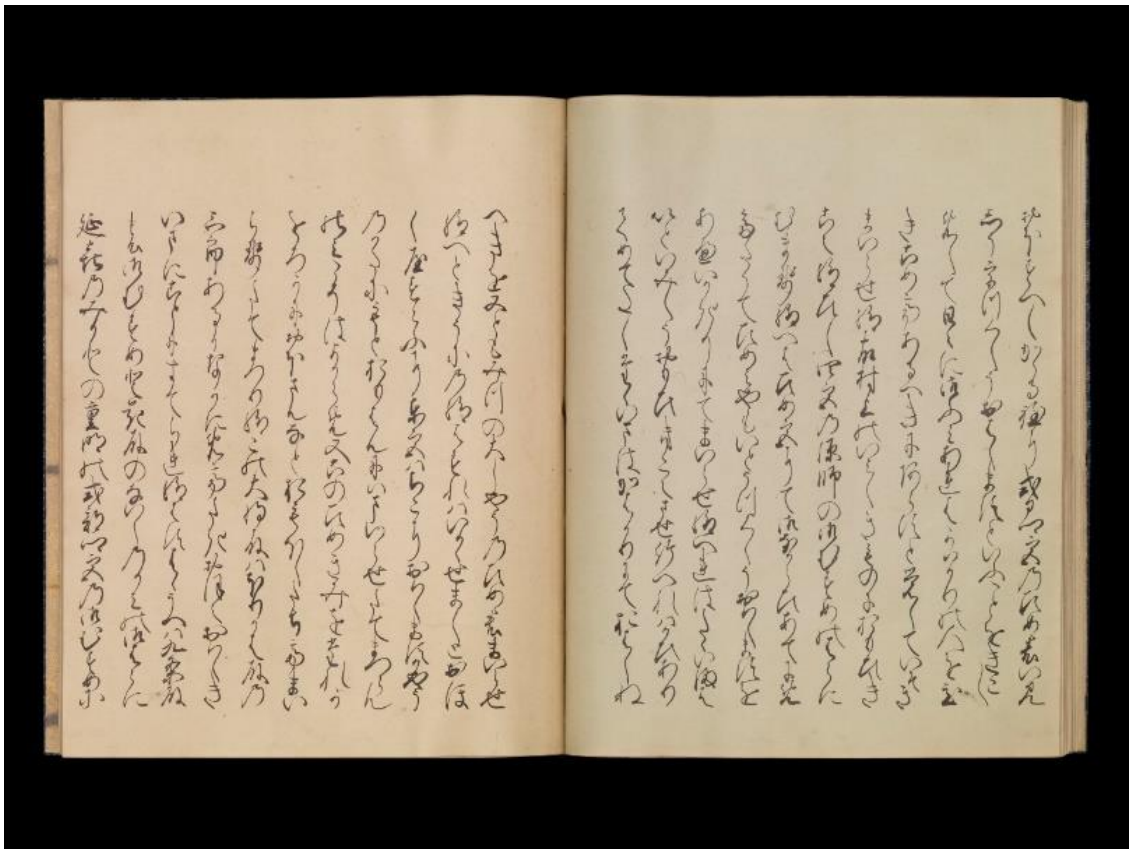


つきてことし十六年になりぬ。いまゝであ
べうもおもはざりつれど、月日のかぎりやあ
らん、かく心ほかにあるを、この月はすまゐの
ことあればさはがしかるべければ、来月ばかりに
にとなんおもふを、東宮くらゐにつき給なば、
わかみやをこそは春宮にはすへめとおもふに、
いのりところどころによくせさせて、おもひのごとく
あべくいのらすべし。をろかならぬ心のうちを
しらで、たれたれも心よからぬけしきのある。いと
くちおしきことなり。あまたあるをだに人は
こをばいみじきものにこそおもふなれ。まして

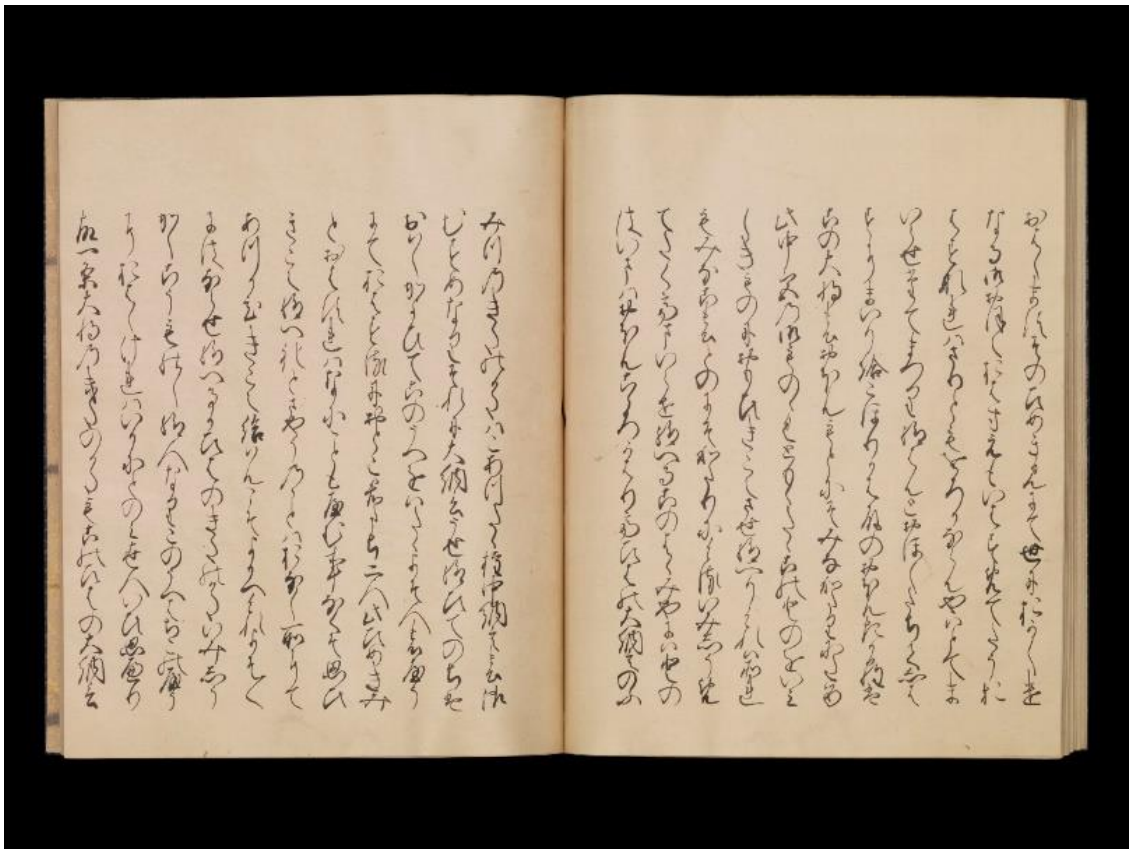
いかでかをろかにおもはん」など、よろづあるべき
ことゞもおほせらるゝ、うけたまはりて、かしこ
まりてまかで給て、女御どのにものさゝめき申
させ給て、おほんとなぶらめしよせてこよみ御
らんじて、ところどころにおほんいのりづかひども
たちさはぐを、かうかうとの給はせねど、とのゝ中
の人々けしきを見ておもへるさま、いふもをろ
かにめでたし。このいゑのこのきんだち、いみじう
えもいはぬ御けしきどもなり。さてすまふなど
もこの君だちまいり給。おとゞのおほんこゝろの
うちはればれしうてまじらはせ給。かくて八月に



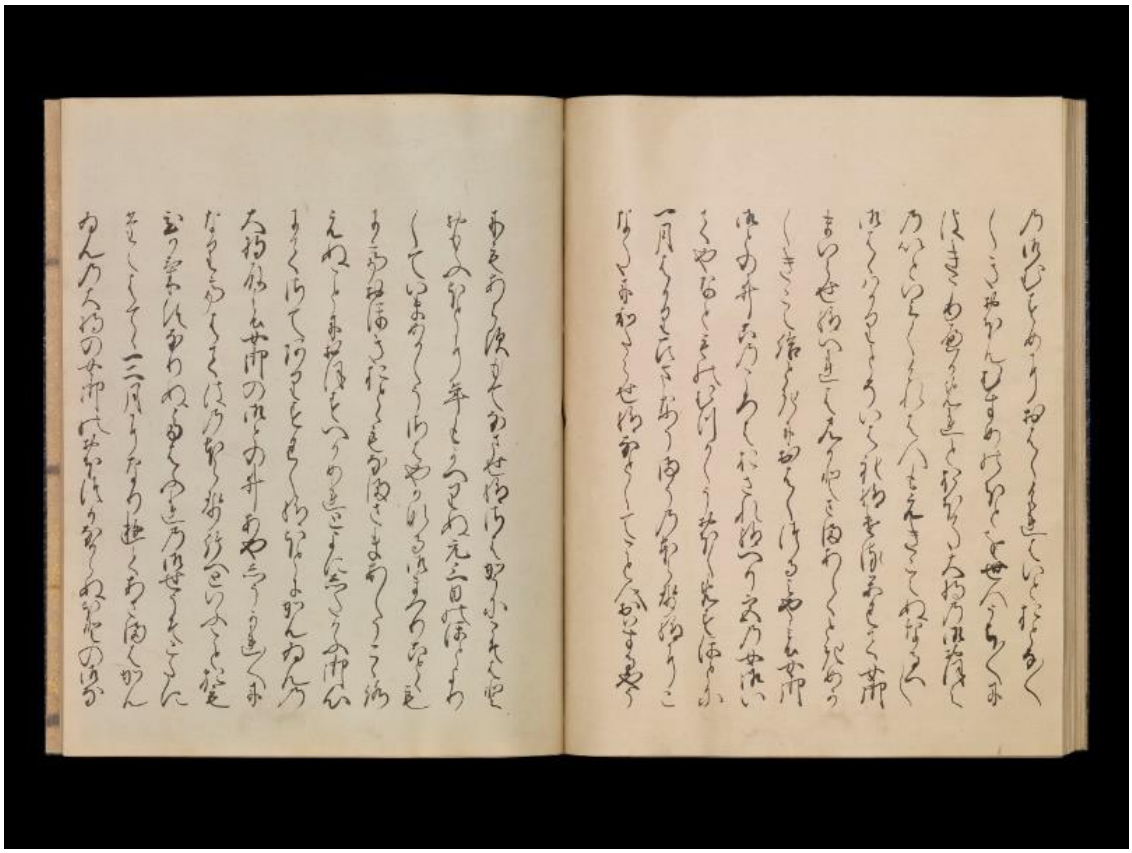
なりぬれば、廿七日御譲位とてのゝしる。その
日になりぬれば、みかどはおりさせ給ひぬ。たう
宮はくらゐにつかせ給ぬ。東宮には、梅つぼの
わかみやゐさせ給ぬ。いへばをろかにめでたし。
世はかうこそはと見えきこえたり。おりゐのみか
どは、ほりかはの院にぞおはしましける。いま
のみかどの御としなどもおとなびさせ給、おほん
心をきてもいみじういろにおはしまして、いつ
しかとさべき人々の御むすめどもをけしきだ
ちの給はす。おほきおとゞこの御世にもやがて
くはんぱくせさせ、中ひめぎみ十月にまいらせ給。
まづほかをはらひ、われ一の人にておはしませば、
さはいへど御心のまゝにおぼしをきつるもある
べきことなりとぞ見えたる。御即位、大じやうゐ
御はらへやなど、ことゞもすぎてすこしこゝろ
のどかになるほどに、おほきおとゞいそぎたち
まいらせ奉り給。女御おほんありさま、つかうま
つる人にも、七八年にならぬかぎりはみえさせ給
ことかたければ、とかくの御有さまきこえがたし。
まさにわろうおはしまさんやは。かくやむごと
なくおはしませば、いといみじうときにしも見え
させ給はねど、おとゞきさきには我あらばと



おぼすべし。かゝる程に、式部卿宮のひめ君、いみじううつくしうおはしますといふことをきこしめして、日々に御ふみあれば、かばかりの人をひきこめてあるべきにあらずと覚していそぎまいらせ給。故村上のいみじきものにおもひきこえ給ひし四宮の、源師の御むすめのはらにむませ給へばひめ宮にて御なからひあてにめでたうて、ひめみやもいとうつくしうおはしますを、あべいかぎりにてまいらせ給へれば、たゞいまはいといみじうおもひきこえさせ給へれば、かひありてめでたし。たゞいまはかばかりにておはしぬべきを、又、「ともみつの大しやうのひめ君まいらせ給へ」と、きうにの給はすれば、いかゞせましとおぼしやすらふに、東宮はちごにおはします、かやうのかたにもとおもはんにはまいらせたてまつらんのみこそはよからめ、又このひめぎみをたれかをろかにおぼさんなどおもほしたちて、まいらせたてまつり給。この大将殿は、ほりかわ殿の三郎、あるがなかにめでたきおぼえおはしき。いまにことすてられ給はず。はゝうへは、九条殿の御むすめ、登花殿のないしのかみの御はらに延喜のみかどの重明の式部卿宮の御むすめに

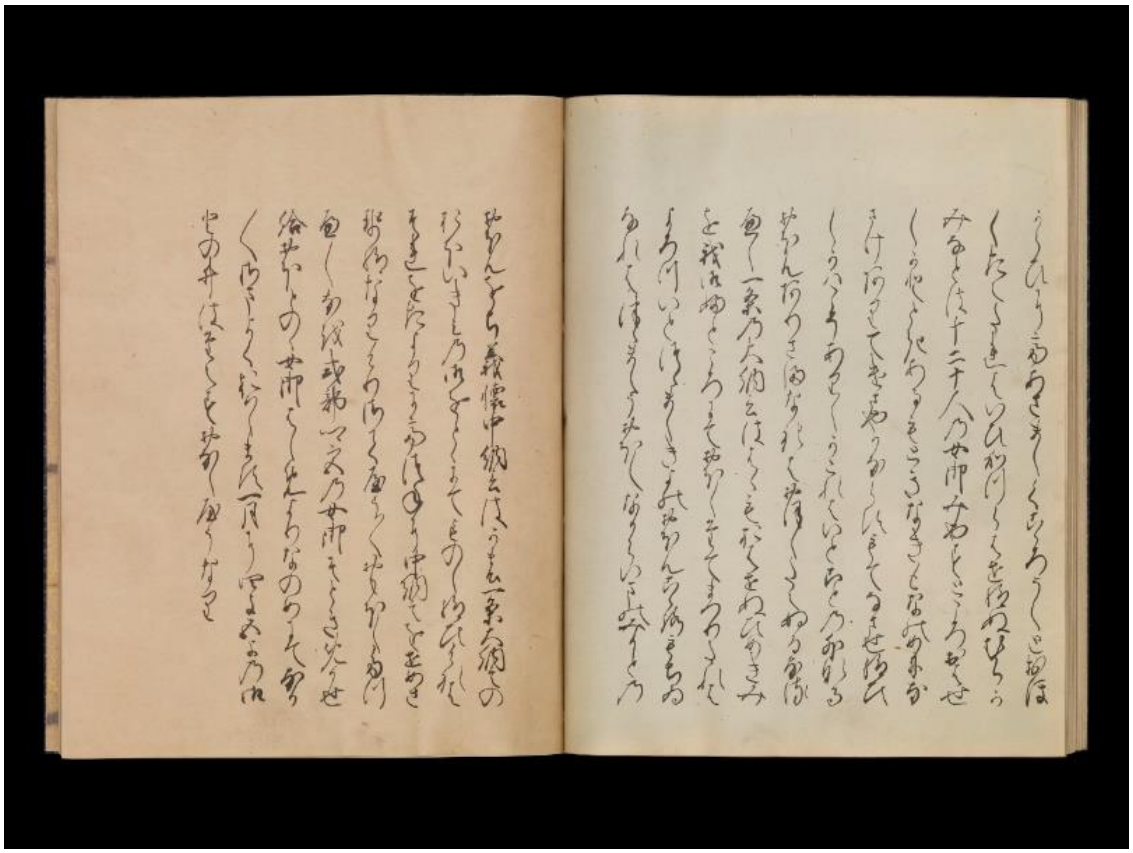


おはします、そのひめぎみにて、世におかしげなる御おぼえおはす。えもいはずめでたうおはすなれば、さりともをろかならんやはとて、まいらせたてまつり給はんとおぼしたちて、しはすにまいり給。こほりかは殿のおほんたからは、この大将のおほんもとにぞみなわたりにたる。此中宮の御ものゝぐどもゝ、たゞこのとのをいみじきものにおもひきこえさせ給へりければ、それもみなこのとのにぞわたりにける。いみじうめでたくてまいらせ給へる。このはゝみやにはとのはいまはおほんこゝろかはりて、びはの大納言のぶみつのきたのかたは、こあつたゞ権中納言の御むすめなり、それに大納言うせ給ひてのちはおはしかよひて、このうへをばたゞよそ人のやうにておはするに、おとこ君だち二人此ひめぎみとおはすれば、なにごともやむ事なくぞ思ひきこえ給へれど、さやうのことはおなじ所にてあつかひきこえ給はんこそよかべけれよそよそにはならせ給へるか、びはのきたのかたいみじうかしこうものし給人なり。このうへはちごのやうにおはしければ、いかにとのみ世人いひ思へり。故一条大将のきたのかたも、このびはの大納言

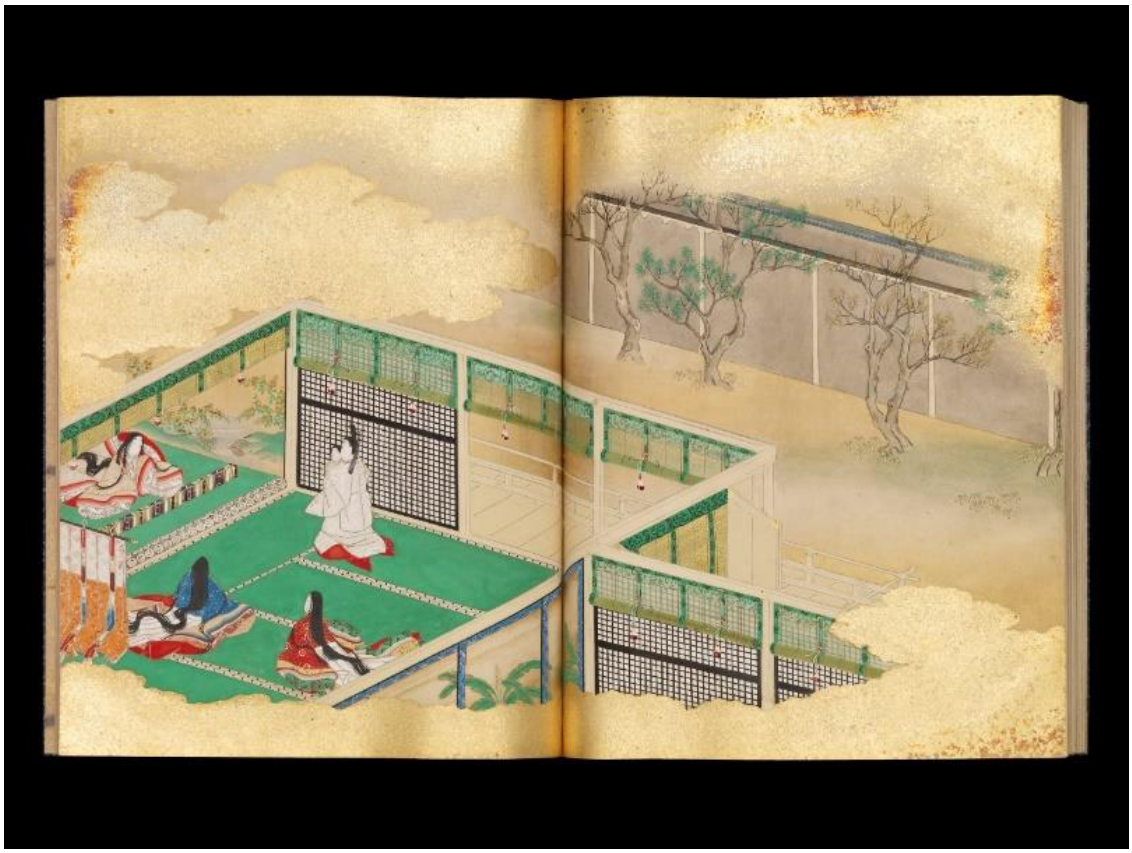


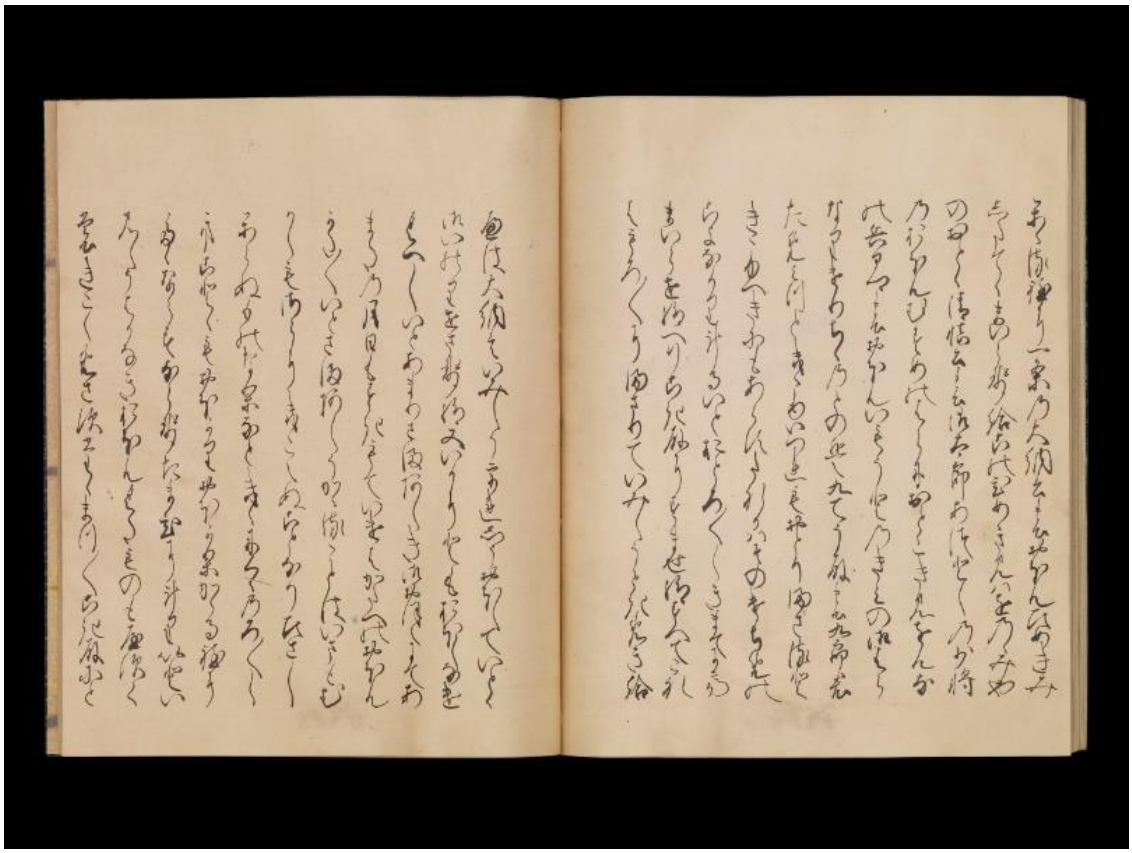
御むすめにおはしければ、いとおとなおとなしきおほんむすめのほどを、世人うちうちにはきこゆべかめれど、おほかた大将の御おぼえのいといみじければ、人もえきこえぬなるべし。御はゝばかりとぞ、いはれ給ける。かくて女御まいらせ給へれば、みかどさまあしくときめかしきこえ給。ときにおはしつるみやの女御、御とのい、このごろはおされ給へり。宮の女御いでやなど、ものむつかしうおぼしめすほどに、一月ばかりひまなうまうのぼらせ給に、こなたにわたらせ給などして、こと人おはするやうにもあらずもてなさせ給。さはかうにこそはとおもふほどに、年もかへりぬ。元三日のほどよりして、いまめかしうさはやかなる御まつりごとゞもにて、おほきおとゞもなまさまあしうこゝろえぬことにおぼすべかめれど、よにしたがふ御心にて、さてありすぐし給ほどに、かんゐんの大将殿の女御の御とのいあやしうかれがれになりて、はては、のぼらせ給へといふことおもひかけずなりぬ。たはぶれの御せうそこだにたえはてゝ、一二月になりゆく。あさま＊はかんゐんの大将の女御のおぼつかならぬほどの御な

＊で本文が約一丁分とびます

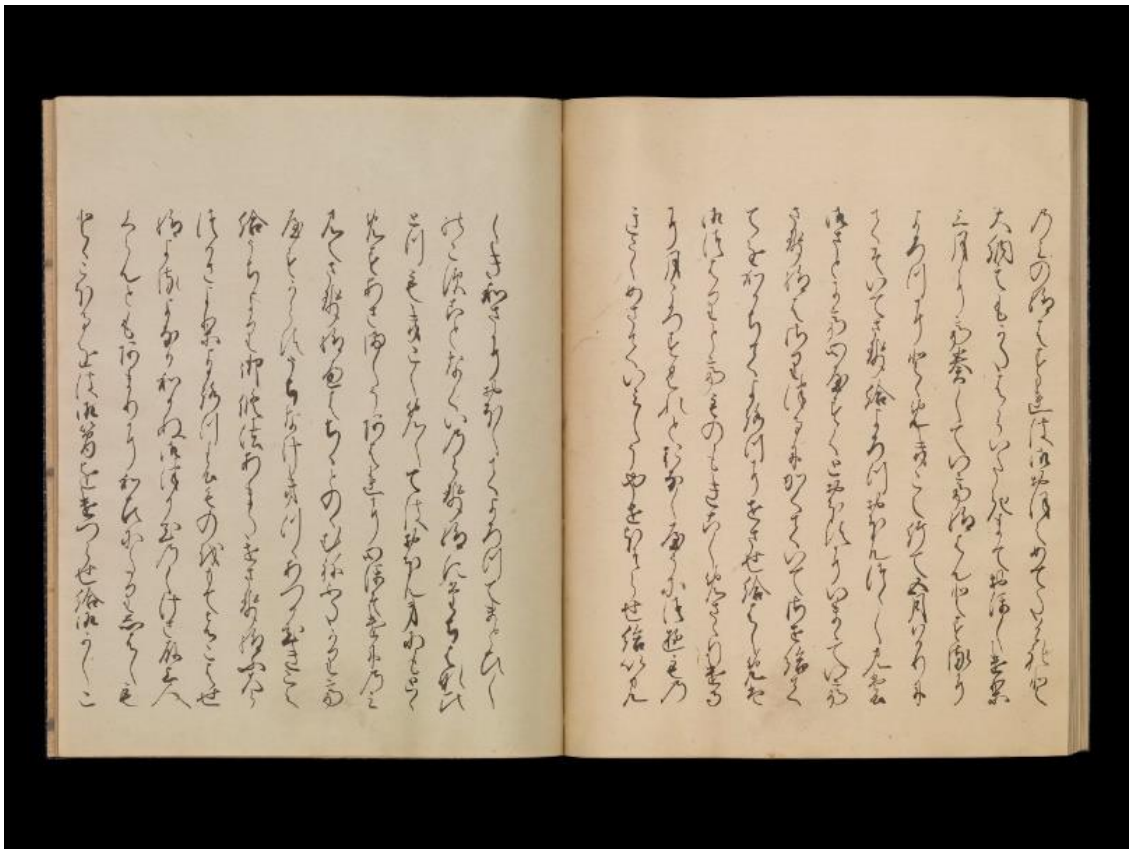


からひにて、あさましくこゝろうしとおぼ
したえたれば、いひわづらはせ給ぬ。むらか
みなどは、十、二十人の女御、みやすどころおはせ
しかど、ときあるもときなきも、なのめにな
さけありて、けざやかなならずもてなさせ給ひ
しかばこそありしか、これはいとことの外なる
おほんありさまなれば、おぼしたえぬるなる
べし。一条の大納言は、はゝもおはせぬひめぎみ
を、我御ふところにておほしたてまつりたれば、
よろづいとつゝましきよのおほんこゝろもちゐ
なれば、つゝましうおぼしながら、いまのみかどの
おほんをぢ義懐中納言は、かの一条大納言の
おほいきみの御をとゝにてものし給ひければ、
それをたよりにて、つねに中納言をせめさ
せ給なりけり。さてやうやうおもほしたつ
べし。なを式部卿宮の女御ぞときめかせ
給。おほとのゝ女御はじめよりなのめにて、なか
なかさまよくおはします。一月に四よ五よの御
とのいはたえず、おなじやうなり

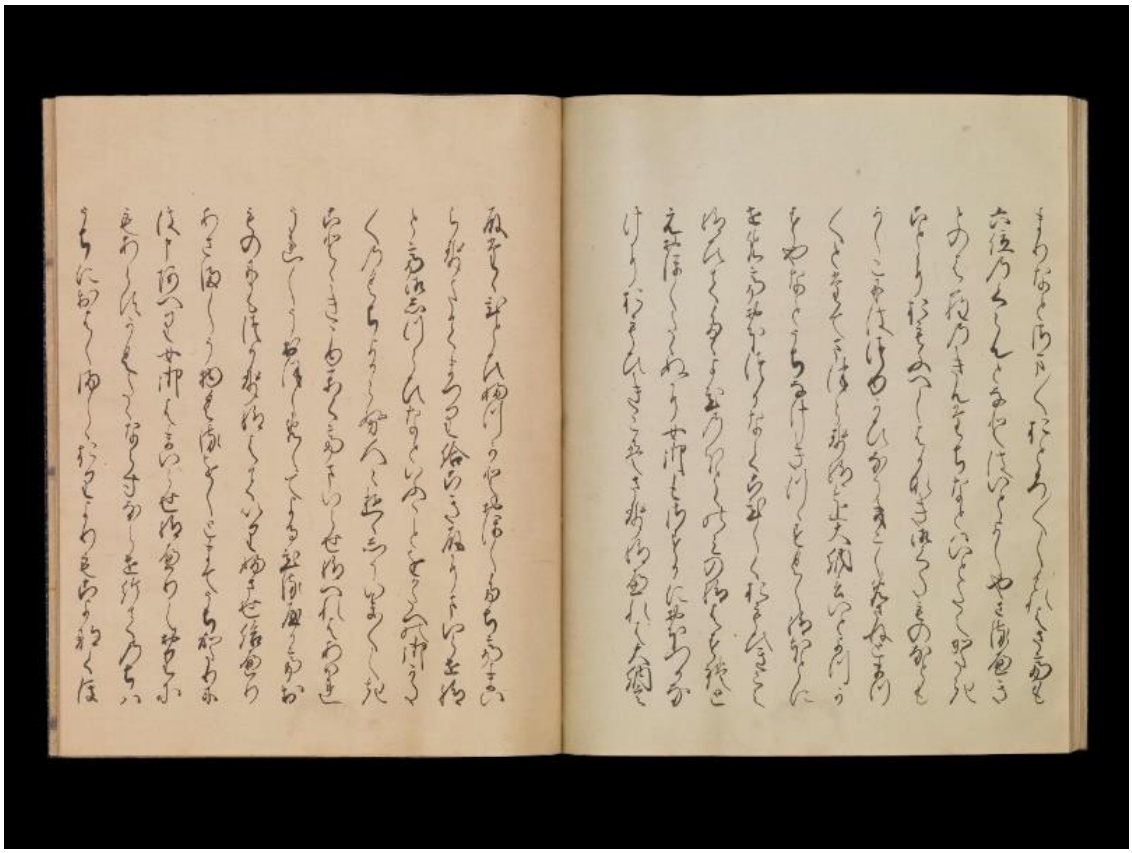




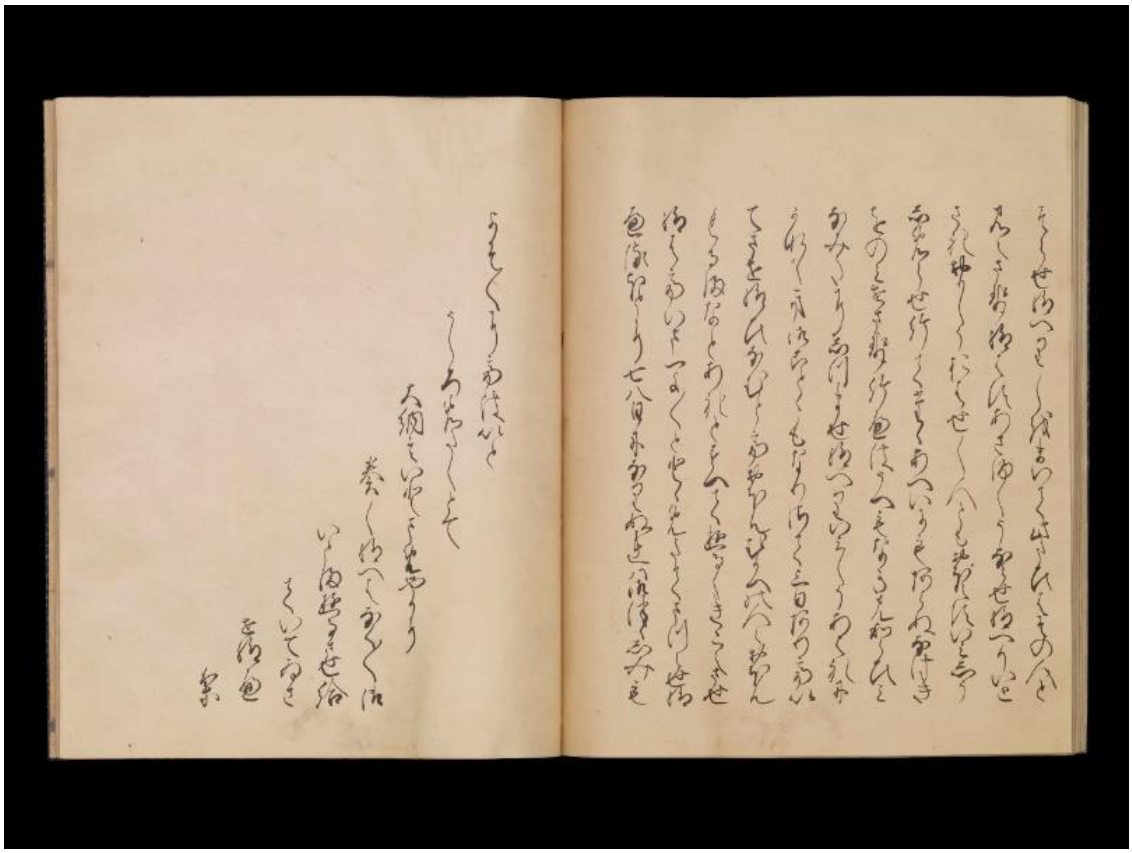
かゝる程に、一条の大納言のおほんひめぎみ
したてゝまいらせ給。このひめぎみは、をのゝみや
のおとゞ清慎公の御太郎、あつとしの少将
のおほんむすめのはらに、おとこぎみ、をんな＊［本文一行なし］
の兵部卿のおほんいもうとのきみの御はら
なりけり。ちゝのとのは九でう殿の九郎君、
ためみつときこゆ。いづれもおとりまさると
きこゆべきにもあらず、たれかはそのけぢめの
こよなかりける。いとおどろおどろしきまでにて
まいらせ給へり。こき殿にすませ給。すべてこれ
はもろもろにまさりていみじうときめき給
へば、大納言いみじううれしうおぼして、いとゞ
御いのりをさせ給。又、いかにともおぼしなげ
くべし。いとあまりさまあしき御おぼえにてあ
またの月日もすぎもていけば、かたへのおほん
かたがた、「いとさまあしう。かゝることは、いまもむ
かしもさらにきこえぬことなり」「ひさし
からぬものなり」など、きゝにくゝのろのろし
きことゞもおほかり。おほかり。かゝる程に、
たゞならずならせたまひにけり。いとい
みじう、はかなきおほんくだものもやすく
もきこしめさず。たゞ「まづまづこき殿にと



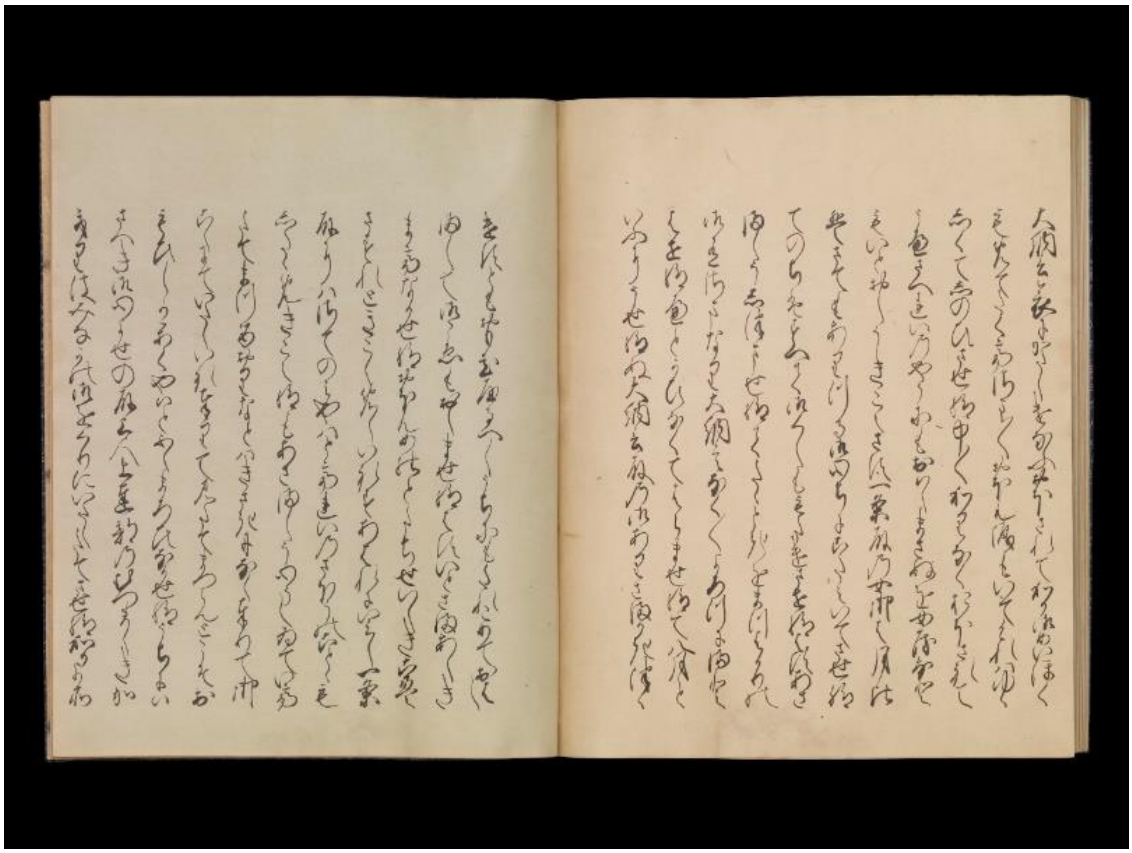
のみの給はすれば、御おぼえめでたけれど、
大納言もかたはらいたきまでおぼしけり。
三月にて奏していで給はんとするに、
よろづにとゞめきこえ給て、五月ばかりに
てぞいでさせ給。よろづおほんつゝしみも
御さとにて心やすくとおぼすに、いまゝでいで
させ給はざりつるに、かくていでさせ給て、
てをわかちてよろづにせさせ給。はじめは
御つはりとて、ものさこしめさゞりける
に、月ごろすぐれどおなじやうにつゆもの
きこしめさで、いみじうやせほそらせ給。いみ
じきわざにおぼして、よろづてまどひし、
のこすことなくいのらせ給に、たちばなひ
とつもきこしめしてはおほん身にもとゞ
めず、あさましうあはれに心ほそげにのみ
見えさせ給へば、ちゝとのゝ、むねふたがりて、
やすからずうちなげきつゝあつかひきこえ
給。うちより御修法あまたせさせ給ふ。くら
づかさよりよろづのものをもてはこばせ
給。よるよなかわかぬ御つかひのしげさ、殿上人、
くらんどもあまりにわびにたり。しばしも
とゞこほるをば御簡をけづらせ給、御かしこ



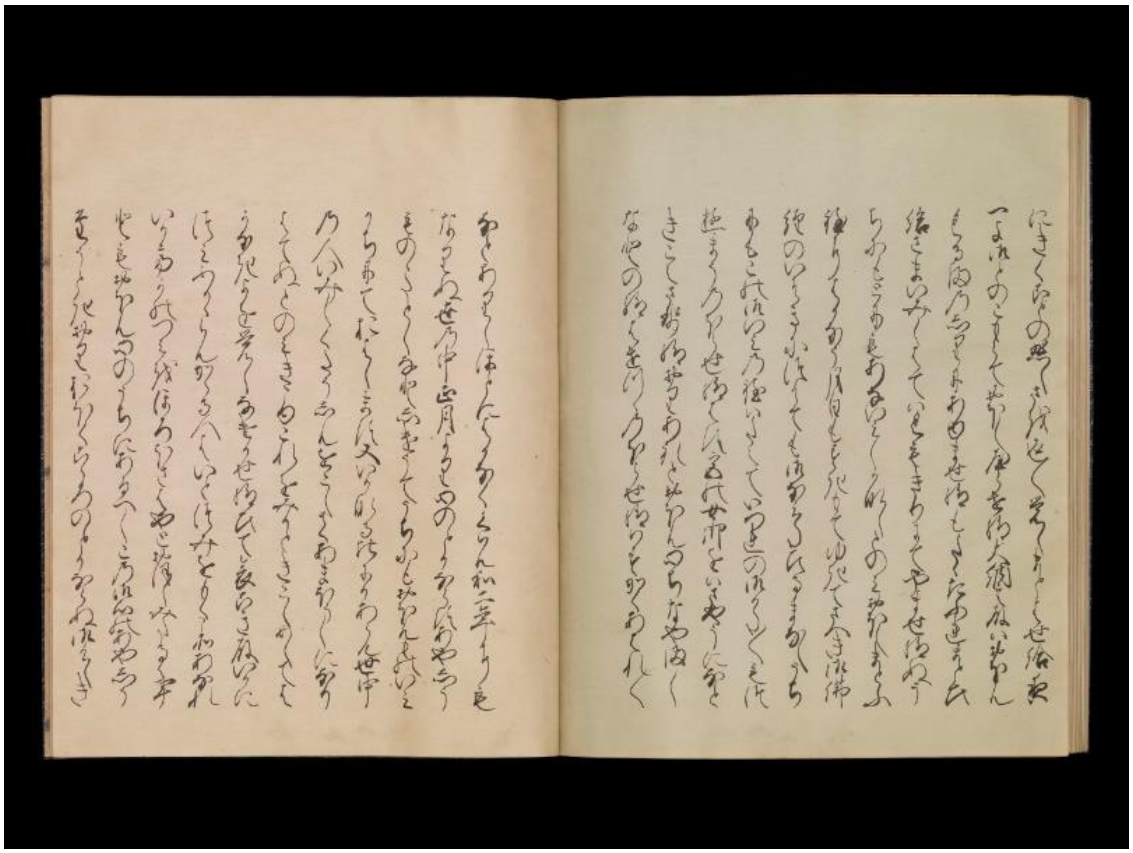
まりなどさまざまおどろおどろしければ、さても六位のくらんどなどはいとよしや、さるべきとのばらのきんだちなどは、いとたえがたきことにおもふべし。はかなき御くだものなども、かしこにはつゆかひなうきこしめさねど、まづまづと、たてまつらせ給を、大納言、いとよづかずやなど、うちなげきつゝすぐし給ほどに、せめておぼつかなくこひしくおもひきこえ給ひて、「たゞよひのほど」ゝのみの給はすれど、えおぼしたゝぬに、女御もさすがにおぼつかなげにおもひきこえさせ給へれば、大納言殿、たゞひとひふつかとおぼしたちてまいらせたてまつり給。こき殿にまいらせ給。とて、御しつらひなどいふことを、かたへの御かたがたのくちよからぬ人々、「ゆゝしういまいましきこと」ゝきこゆ。かくてまいらせ給へれば、あはれうれしうおぼしめして、よるひるやがておものにもつかせ給はでいりふさせ給へり。「あさましう物ぐるをし」とまでうちわたりには申あへり。女御はまいらせ給へりしおりにもあらず、かくたゞならずならせ給てのちは、うちにおはしましゝおりよりもこよなくほ



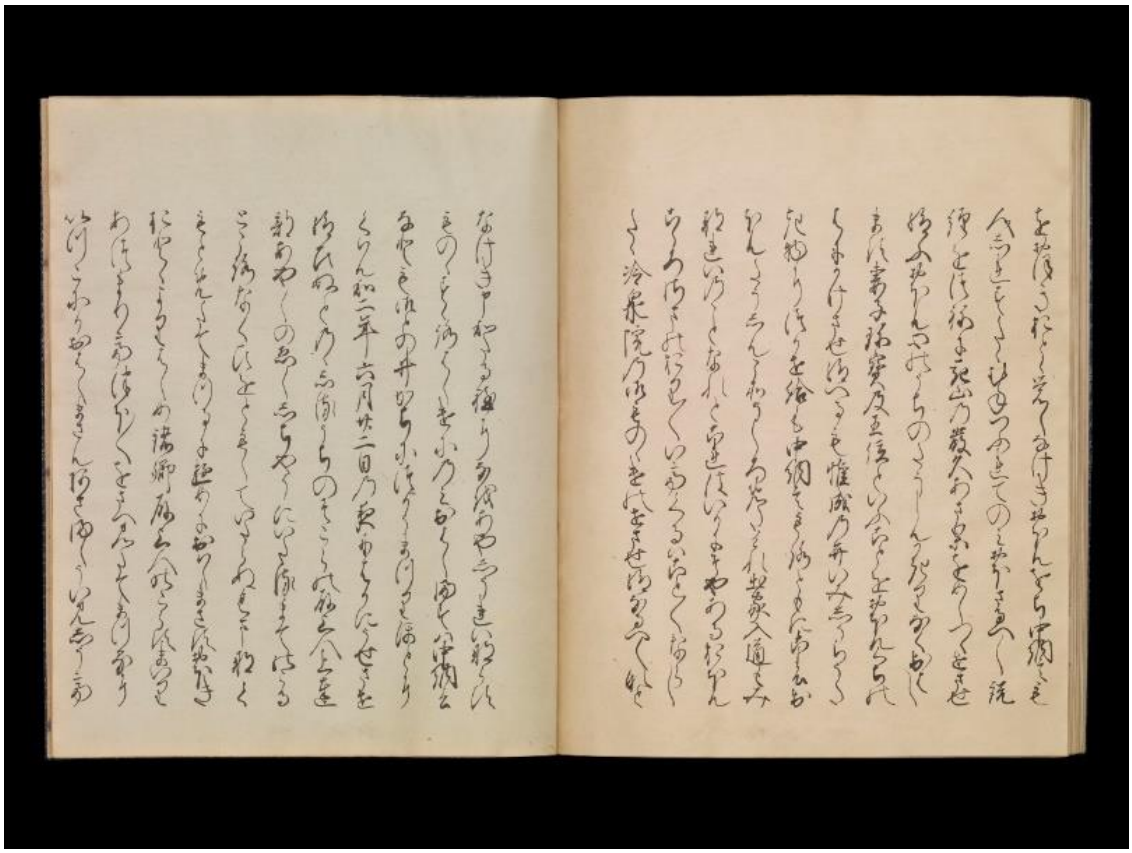
そらせ給へりしを、まいて此たびはその人と
見えさせ給はず、あさましうならせ給へり。いと
ざれおかしうおはせし人ともおぼす、いみじう
しめらせ給て、たゞあべいにもあらぬなげき
をのみせさせ給へば、うへもなきみわらひみ、
なみだにしづませ給へり。いみじうあはれに
かなしき御ことゞもなり。さて三日ありて、い
でさせ給ひなむとて、おほんむかへの人々、おほん
くるまなどあれど、すべてゆるしきこえさせ
給はで、いま一よいま一よと、とゞめたてまつらせ給
へるほどに、七八日になりぬれば、御つゝしみも
よそよそにてはいと
うしろめたしとて、
大納言いとまめやかに
奏し給へば、なくなく御
いとまゆるさせ給
て、いでゐさ
せ給へ
り。



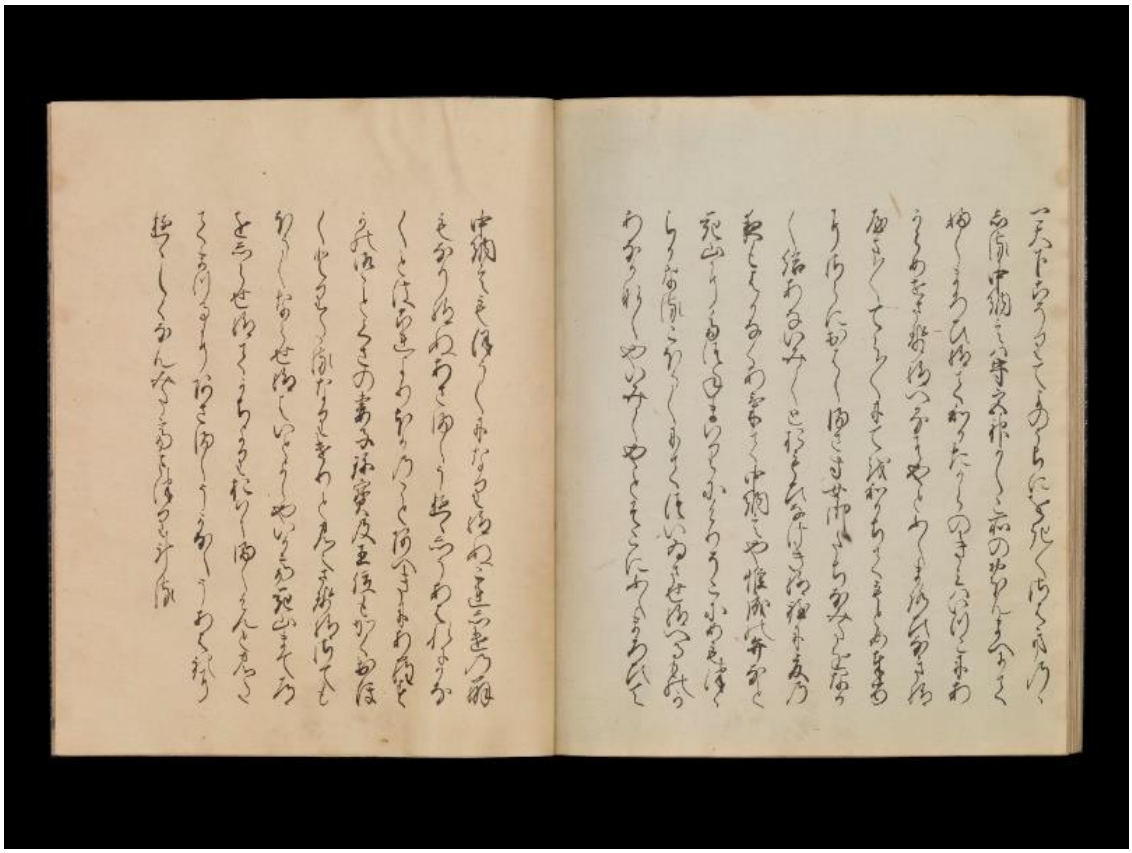
大納言哀にかたじけなふおぼされて、わが御めいぼく
もめでたくて、さまざまおほん涙もいでければ、ゆゝ
しくてしのびさせ給。中々わりなくおぼされて、
うへさへれいのやうにもおはしまさぬを、女房など
もいとおしうきこえさす。一条殿の女御は、月頃
はさてもありつる御心ちに、こたみいでさせ給
てのちは、すべて御ぐしももたげさせ給はず、あさ
ましうしづませ給て、たゞときをまつばかりの
御有さまなり、大納言なくなくよろづにまど
はせ給へど、かひなくて、はらませ給て八月と
いふにうせ給ぬ。大納言殿の御ありさま、かきつゞ
けずともおもひやるべし。うちにもたれこめておはし
まして、御こゝろもおしませ給はず、いとさまあしき
までなかせ給。おほんめのとたちせいしきこえ
さすれど、きこしめしいれず、あはれにいみじ。一条
殿には、さてのみやはとて、れいのさほうのことゞも
したゝめきこえ給も、あさましう心うし。「ゐていで
たてまつるおりなどは、ささきになし奉りて、御
こしにていだしいれ奉りてみたてまつらんとこそお
もひしか、かくやは」と、ふしまろびなかせ給。うちには
さべき御心よせの殿上人、上達部のむつまじきか
ぎりは、みなかの御をくりにいだしたてさせ給。わがよそ



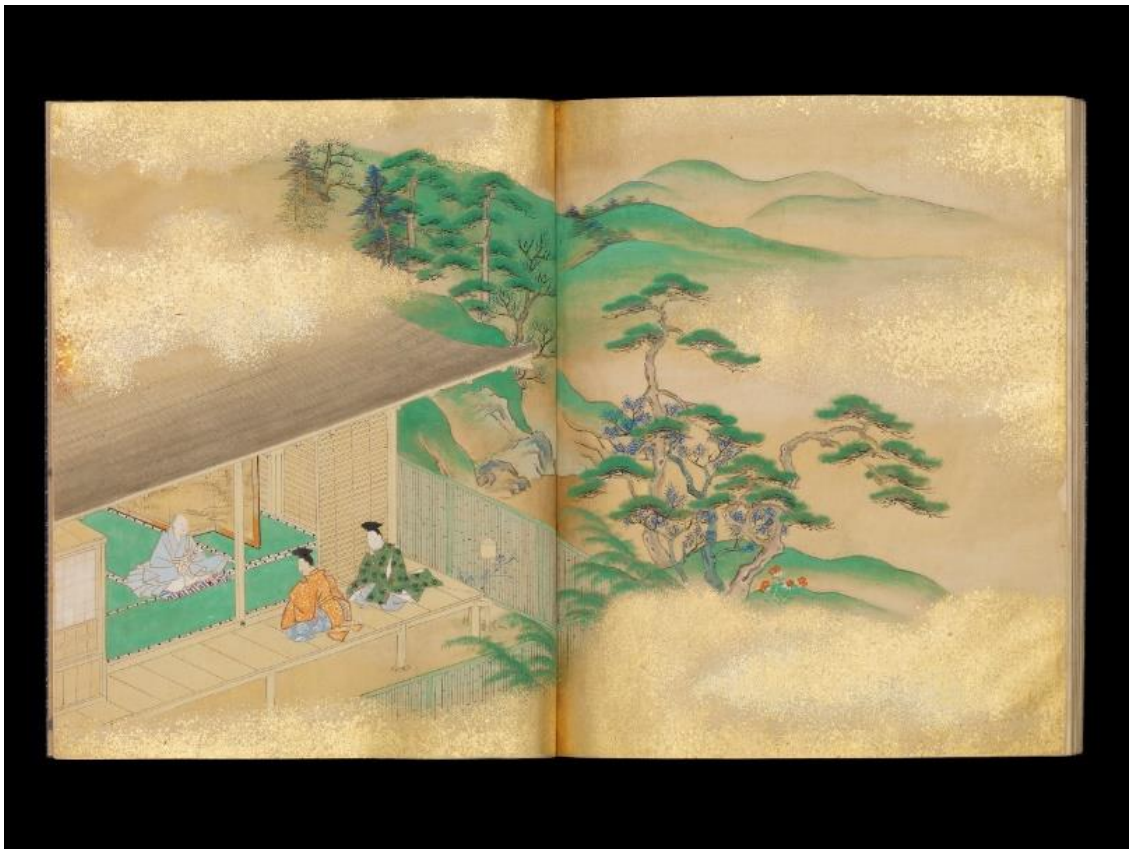
にきくことの悲しさを、返々覚しまどはせ給。夜一よ御とのごもらでおぼしやらせ給。大納言殿はおほんくるまのしりにあゆませ給も、たゞたふれまどひ給さまいみじ。はてはくもきりにてやませ給ぬ。うちにもとにも、あないみじ、かなしとのみ、おぼしまどふ程に、はかなう月日もすぎもてゆきて、さべき御佛経のいそぎにつけても御なみだひるまなし、うちにもこの御いみの程は、たえていづれの御かたがたもつゆまうのぼらせ給はず。宮の女御をばさやうになどきこえさせ給おりあれど、「おほん心ちなやまし」などの給はせつゝ、のぼらせ給はず。かくあはれあはれなどありしほどに、はかなくくはん和二年にもなりぬ。世の中正月より心のどかならず、あやしうものゝたとしなどしげうて、うちにもおほんものいみがちにておはします。又、いかなる頃にかあらん、世中の人いみじくだうしんをこしてあまほぷしになりはてぬとのみきこゆ。これをみかどきこしめして、はかなきよを覚しなげかせ給ひて、哀、こき殿いかにつみふかゝらん、かゝる人はいとつみをもくこそあなれ、いかでかのつみをほろぼさばやと、おぼしみだるゝ事ども、おほん心のうちにあるべし。この御心のあやしうたうときおりおほく、こゝろのどかならぬ御けしき

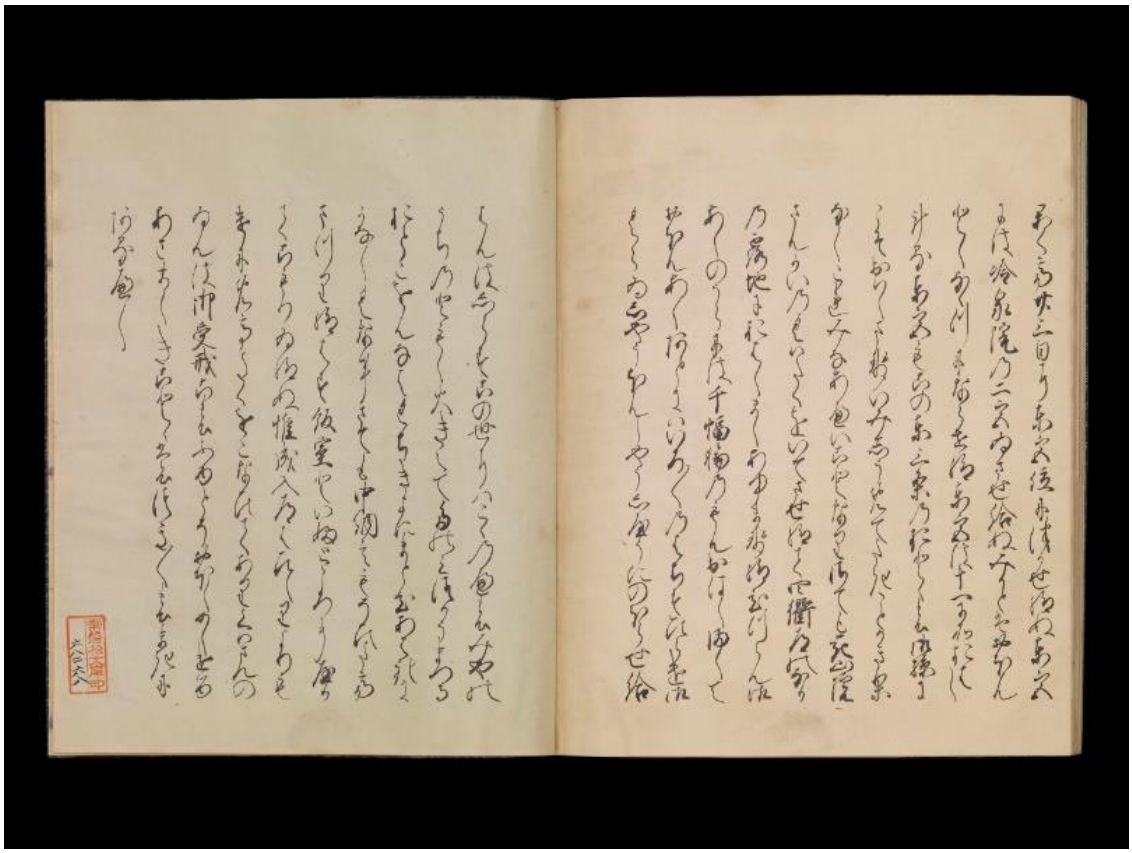
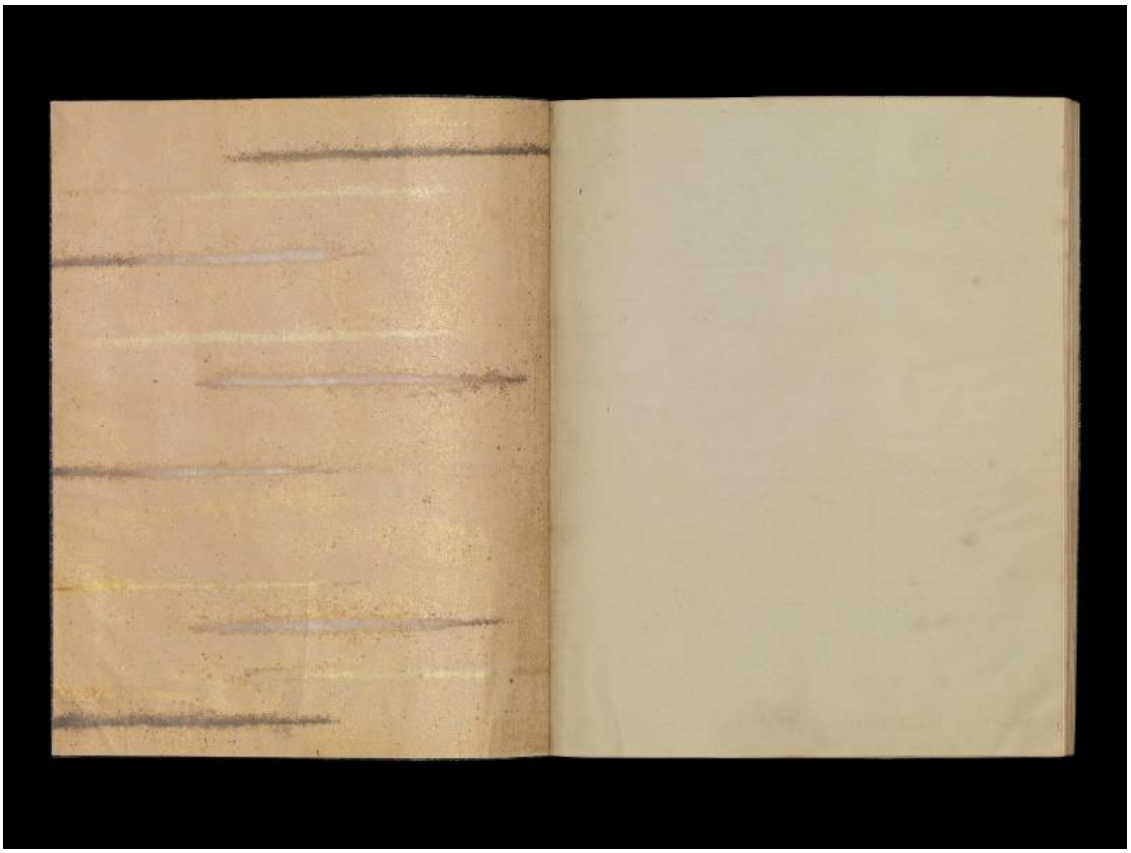
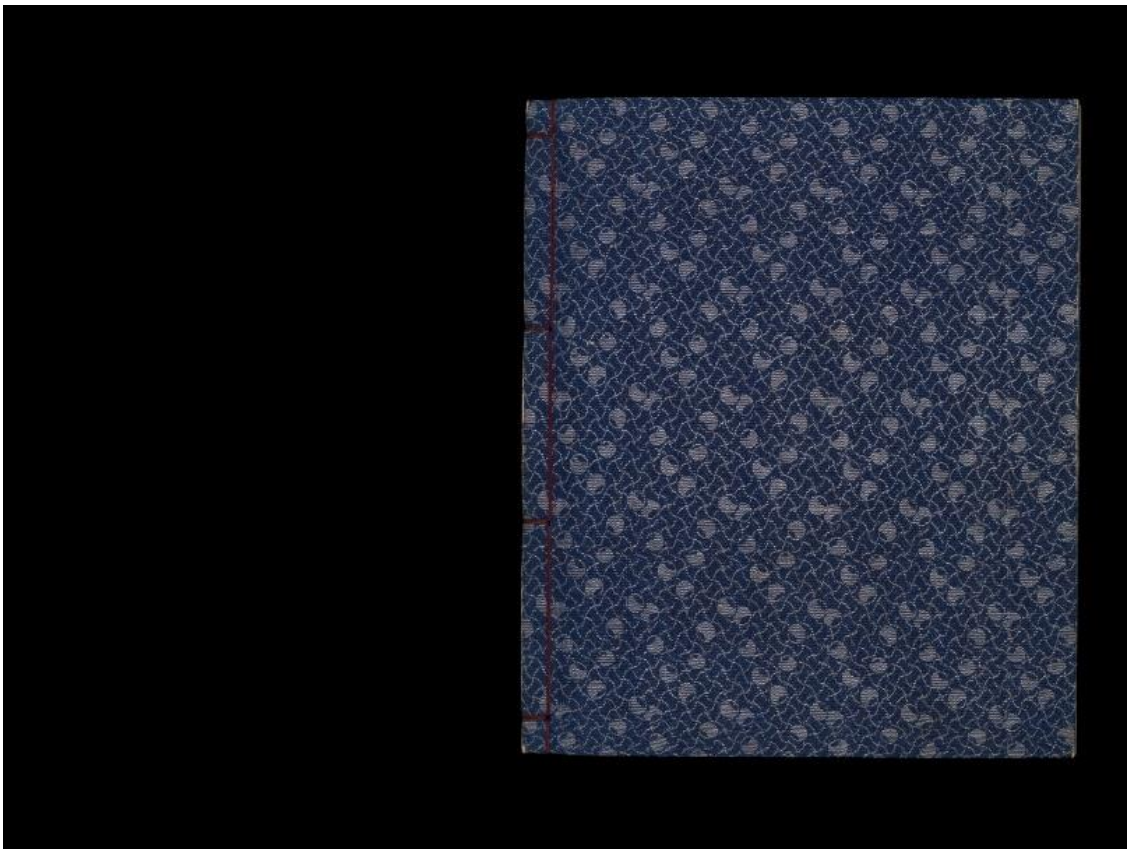


をおほきおとゞ覚しなげき、おほんをぢ中納言も
人しれずたゞむねつぶれてのみおぼさるべし。説
経をつねに花山の厳久あざりをめしつゝせさせ
給ふ、おほん心のうちのだうしんかぎりなくおはし
ます。「妻子珍寶及王位」といふことを、おほんくちの
はにかけさせ給へるも、惟成の弁、いみじうらうた
き物につかせ給も、中納言もろともに、「このお
ほんだうしんこそうしろめたけれ。出家入道もみ
なれいのことなれど、これはいかにぞやある、おほん
こゝろざまのおりおりいでくるは、ことごとならじ、
たゞ冷泉院の御ものゝけのせさせ給なるべし」など
なげき申わたる程に、なをあやしうれいならず
ものゝすゞろはしげにのみおはしますは、中納言
なども御とのいがちにつかうまつりほどに、
くはん和二年六月廿二日の夜にはかにうせさせ
給ひぬとのゝしる。うちのそこらの殿上人、上達
部、あやしの゛ゑじ、しちやうにいたるまでのこる
ところなくひをともして、いたらぬくまなく
もとめたてまつるに、ゆめにおはしまさず。おほき
おとゞよりはじめ、諸卿、殿上人のこらずまいり
あつまりて、つぼつぼをさへ見たてまつるに、
いづこにかおはしまさん、あさましういみじうて、



一天下こぞりて、よのうちにせきせきさはぎのゝしる。中納言は守宮神、かしこ所のおほんまへにてふしまろび給て、「わがたからのきみいづこにあからめせさせ給へるぞや」と、ふしまろびなき給。やまやまてらでらにてをわかちてもとめ奉るに、さらにおはしまさず。女御たちなみだをながし給。あないみじとおもひなげき給程に、夏の夜もはかなくあけて、中納言や惟成の弁など花山にたづねまいりにけり。そこにめもつゞらかなるこほうしにてついゐさせ給へるものか。あなかなしやいみじやと、そこにふしまろびて、中納言もほうしになり給ぬ。これしげの辨もなり給ぬ。あさましうゆゝしうあはれにかなしとは、これよりほかのことあべきにあらず。かの御ことぐさの「妻子珍寶及王位」もかくおぼしとりたるなりけりと見えさせ給。さてもほうしならせ給はいとよしや。いかで花山まで道をしらせ給てかちよりおはしましけんと、見たてまつるに、あさましうかなしうあはれにゆゝしくなんみたてまつりける。





かくて、廿三日に東宮位につかせ給ぬ。東宮には冷泉院の二宮ゐさせ給ぬ。みかどはおほんとしなゝつにならせ給。東宮は十一にぞおはしける。東宮もこの東三条のおとゞの御孫にこそおはしませ。いみじうめでたきことかぎりなし。これみなあべいことなり。さても花山院さんがいのくはたくをいでさせ給て、四衢道のなかの露地におはしまし、あゆませ給ひつらん御あしのうらには、千幅輪のもんおはしまして、おほんあしあとにはいろいろのはちすひらけ御くらゐじやうぼんじやうしやうにのぼらせ給はんはしらず。この世にはこゝのへのみやのうちのともし火きえて、たのみつかうまつるおとこをんなはくちきよにまどひ、あはれにかなしくなむ。さても中納言もそひたてまつり給はず、飯室といふところにやがてこもりゐ給ぬ。惟成入道は、ひじりよりもけにめでたくをこなひてあり。くはさんのゐんは御受戒、このふゆとぞおぼしめしける。あさましきことゞもつぎつぎのまきにあるべし。